

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 181

2017.12.12

神戸女学院

学報委員会

中高部礼拝の歴史と意味

中学部・高等学部 部長 林 真理子

神戸女学院が創立145周年に向けて着実な教育活動を続けていることに感謝しています。その一方で昨今、弾道ミサイル飛来に備え、Jアラート発令時の迅速な対応が不可欠となり、中高部にも警報受信装置が備え付けられました。緊急時に生徒の安全を確保するため全力を尽くすのは教育機関として当然の責任ですが、戦争中のように、突然の警報に怯えつつ緊急避難を余儀なくされる日が近い将来来るかもしれないと想像するだけで、暗澹たる気持ちになります。

そんな暗い気持ちを吹き飛ばし、喜びや希望の光で心を照らし、進むべき道を明示してくれるのは、毎朝の全校礼拝のひと時です。西日本における最初のキリスト教女子教育機関として出発した本校において、礼拝は142年守り続けてきた大切な財産であり、精神的バックボーンです。産経新聞の7月21日夕刊第1面に掲載されたシリーズコラム『関西の力』第5部「教育」2章「自由と自立」の第3回「成長の証し」では神戸女学院中高部の礼拝が紹介されました。記事は礼拝を通して「生徒達自身がそれぞれ自立して思索を深める環境が、同校の人材育成の源」であるという文でしめくくられています。生徒達が学校生活の中で気づき、考えたことを壇上で話し、「思考を深める先輩や同級生の姿が刺激となり、生徒それぞれが自らの問いへの答を探していく」姿勢こそ神戸女学院の力の真髄であるというメッセージから礼拝の意味を再確認するとともに、中高部で守られてきた礼拝の歴史と意味について調べてみたいと思うようになりました。

それに加え、今年はキリスト教学校教育同盟の関



西地区校長会や全国広報委員会で多くのキリスト教主義学校の礼拝の状況について情報交換する機会がありました。そして、多くのキリスト教主義学校では全校礼拝を守る礼拝堂がなく、中学と高校が交代で礼拝堂を使用している、低学年はクラス礼拝を守り、上級学年のみが礼拝堂での礼拝をする、ホームルーム教室で放送礼拝を守るという状況であると知りました。全校生が一堂に会せる礼拝堂があり、演奏の奉仕をしてくださるオルガン奏者や自らの体験や考えを伝えたいと志願してくださる在學生、卒業生、教員など多様な登壇者に支えられている本校の

恵まれた礼拝環境に感謝しつつ、調べたことを皆様と分かち合いたいと存じます。

さて『神戸女学院百年史 総説』p.139-141によると、創立当初、生徒の大半が寄宿舎生であった関係もあり、朝夕に祈祷会を守っていたそうですが、週日に礼拝をおこなっておらず、毎日全校礼拝を守るようになったのは、1888年に新講堂が完成した後であったようです。当時の礼拝の雰囲気としては、「新来のピューリタニズムと伝統の旧武士道精神、隣人への奉仕の精神」が主流であったと『神戸女学院百年史 各論』p.83に記載されています。厳格な自己抑制と他者への献身を理想とし、祈りを合わせる中で、生徒たちは海外から命がけて日本に渡ってこられた宣教師に倣い、その教えを校外に広めるべく、宣教精神を養ったのでした。

ブラウン校長の時代になると、聖書の中から一節を選び年間標語とする習慣が始まりました。岡田山キャンパス完成時はすでに軍国主義の波が押し寄せていました。第2次世界大戦中、当局からの礼拝廃止の要求に従わず、礼拝堂の講壇から聖書を一度も降ろさなかったのが神戸女学院の矜持ですが、礼拝を続けるためには様々の譲歩・忍耐・柔軟な対応が必要になりました。

戦争終結直後の1945年12月20日、第6代畠中院長が神戸女学院の学生生徒と進駐軍アメリカ人兵士の合同クリスマス礼拝を企画実施されました。『神戸女学院百年史 総説』p.276には「学生のうち、ある人はこのクリスマスの儀式にホロ苦いものを感じ、あまりの演出に興をそがれた人もあり、また冷やかな目で見ている人もいた。しかし、戦いのない平和の証しをこの礼拝の中に感じ、この儀式の中にキリスト教に培われた神戸女学院の伝統を感激的に読みとろうとする人もいた。」と記載されています。戦後の混乱期に、かつては敵同士であった人たちがキリストの名のもとに一堂に会し、ともに神様を讃美する中で平和と喜びを共有したことこそ、「愛神愛隣」の精神の真骨頂と言えるでしょう。

戦後の新学校教育法の下、中高部では毎朝の全校礼拝が粛々と続けられました。当時、木曜日は自治会生徒によって運営される礼拝、金曜日は英語礼拝でした。私自身も中高部在学中、金曜日に英語の讚美歌を歌ったことを記憶しています。1953年からは

宗教強調週間が始まりました。当初は春と秋の年2回あり、春には学内講師が、秋には学外講師が説教を担当されたようです。この頃になると、保護者がクリスチャンである生徒は3割未満となりましたが、中学部生徒の6割以上が日曜学校か教会の礼拝に参加していたそうです。毎日早朝礼拝・全員礼拝があったことや木曜日の献金は現在も変わっていません。学内でのクリスマス礼拝は創立以来欠かさず守られていましたが、学院関係者や保護者からの要望もあり、「学院のキリスト教主義教育を、より多くの人びとに理解して貰う主旨」（『神戸女学院百年史総説』p.460）から、1973年に初めて夜間のクリスマス礼拝を一般公開し、現在の「学院クリスマス」として定着しました。

1930年代に高等部・大学部に在学しておられた武田清子氏は『神戸女学院百年史 各論』でデフォレスト先生が「一人ひとりが自主性をもって自らの果たすべき責任を十分に果たす人間となるという意味での自由を大切にされた」ということを述べた上で「神戸女学院の教育が個人の自主性、自由、責任ということを変に強調し続けたのは、(中略)このような『神への私の応答』『神から託された私のミッション』という信仰に基づく個的人格性を重視する人間観に立つものであった。」と論じておられます。現在の中高部礼拝では、昔に比べると礼拝参加者のクリスチャン比率も低くなり、登壇者の多くも牧師さんのように神学の専門家ではありません。したがって、礼拝で話されるお話の大半は聖書箇所的神学的な解釈ではありません。しかし、聖書の示す真理をよりどころに、聖書の物語や他者の人生に触れ、感動したり共感したり問題解決の糸口を見つけたりすること、強さも弱さも含めてありのままの自分自身と対峙すること、人生の目標を定め前進する力を得ること等、神様の呼びかけに応え、与えられたミッションを発見する尊いひとときであるということは今も昔も変わりません。若き魂の率直な語りから、私たちが想像だにしない化学反応が起こることこそ神戸女学院の力の源だと確信しています。

今後、神戸女学院の精神的バックボーンである礼拝を、感謝のうちに守り続けることができるよう、全員で祈りを合わせてまいりたいと存じます。

「故城崎進元理事長・院長追悼礼拝」報告

8月1日に永眠されました元理事長・院長の故城崎進先生の追悼礼拝が11月22日(水)午後3時から、本学院講堂において、執り行われました。

同窓生、教会関係者、ご遺族、学院関係者など約100名が参列し、一同で哀悼と祈りの時を持ちました。

礼拝は、中野敬一チャプレンの司式と西山聡子オルガニストの奏楽で行われ、一同による讃美歌(280番)斉唱(当日の讃美歌は全て故人愛唱の讃美歌)、斉藤言子学長による聖書朗読、林真理子中高部長による祈祷、ご遺族(伊藤愛子様、皆本礼子様)による「主のとうときみことばは(讃美歌284番)」の二重唱、司式者による聖書朗読に続く、飯謙チャプレンの式辞の中では、故城崎先生の研究者、教育者としての実直な姿勢や本学院理事長・院長としての業績などが語られた後、祈りが捧げられました。

一同による讃美歌(532番)斉唱を経て、追悼の言

葉においては、松澤員子本学院元理事長・院長と榎本裕見子学長室課長(元院長室秘書)から、理事長・院長在任中の故城崎先生との関わりがそれぞれに語られました。続く一同による讃美歌(434番)斉唱の後、司式による祝祷が捧げられました。

ご遺族代表者、城崎吟子様のご挨拶に続き、森孝一理事長・院長からは、故城崎先生が阪神淡路大震災という学院の未曾有の大惨事に際して、強いリーダーシップを発揮され復旧の基を据えられたことへの感謝をもって、閉式の辞を述べられました。最後に参列者による献花により礼拝は締めくくられました。

追悼礼拝終了後には、新社交館にてご遺族を囲んで茶話会が行われ、参列者各々が故城崎先生を偲ぶひとときを持ちました。

(総務課長)

	司式	チャプレン	中野 敬一	
	奏楽	オルガニスト	西山 聡子	
前 奏	JS.バハ「嚴聖のイエスよ、我らここに集いて」 BWV731			
讃美歌	280番(故人愛唱)	一	同	
聖書朗読	詩編 23 編	学 長	斉藤 言子	
祈 禱		中高部長	林 真理子	
二重唱	284番(1964年発版) 主のとうときみことばは		伊藤 愛子 皆本 礼子	
聖書朗読	ヨハネによる福音書 6章 12-13 節		中野 敬一	
式 辞		チャプレン	飯 謙	
讃美歌	532番(故人愛唱)	一	同	
追悼の言葉		元理事長・院長 学長室課長 (元院長室秘書)	松澤 員子 榎本 裕見子	
讃美歌	434番(故人愛唱)	一	同	
祝 禱			中野 敬一	
挨 拶		遺族代表 院 長	城崎 吟子 森 孝一	
献 花				



茶話会会場にて

神戸女学院特別講演会 「タルカット先生に導かれて～小野鶴、小野アンナ、オノヨーコと神戸女学院～」

9月30日(土)、講堂で北海道大学名誉教授、北星学園大学教授の小野有五先生を講師にお迎えして、神戸女学院特別講演会「タルカット先生に導かれて～小野鶴、小野アンナ、オノヨーコと神戸女学院～」が開催されました。

昨年7月、森院長が北星学園の研修会に講師として招かれ、神戸女学院の歴史についてお話したことがきっかけとなり、小野先生がお祖母様にあたる小野鶴さん(明治22年卒業の第6期生の同期生)の史料・情報収集のために学院をお訪ねくださったのが今年の4月4日。そして、5月22日のタルカット先生の墓前礼拝へのご参列に続いて、今回講演会の講師としてお招きすることとなりました。

先生は多岐にわたる「環境ガバナンス」活動を展開なさっている地理学者であり、教派を超えた信仰をお持ちのクリスチャンでいらっしゃいます。

お父様の最初の妻となってロシアから来日し、多くのバイオリニストを育てた小野アンナ氏、従姉にあたるオノヨーコ氏、先生ご自身の一族の歴史を探ねる旅へと、お祖母様がタルカット先生と出会ったことから始まる小野家の壮大かつ感動的な物語を熱く語っていただきました。(ご講演については、「史料室の窓」でもご紹介しています。)

講演会終了後は、学生ツアー・マイスターによるキャンパスツアーが行われ、今年度のプロジェクト科目受講生およびツアー・マイスター養成講座受講生28名がデビューいたしました。晴天のもと、400名あまりの方々にご参会いただきました。以上、感謝とともにご報告させていただきます。

(院長室課長)



タルカット先生関連書籍も展示された図書館では気さくに記念撮影やサインにも応じていただきました



講演中の小野有五先生



タルカット先生の墓前で談笑する小野先生と森院長



講演会に先立って開催された学生ツアー・マイスターとの懇談会でお話しくださる小野先生



当日司会を担当した学生ツアー・マイスター

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Nishinomiya. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added "Japan Education Exchange" to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

Stronger ties between the U.S. and Japan

Vice President of KCC-JEE

Jeanne Sokolowski



This past June, I was fortunate enough to receive an International Program Administrators' grant to Japan. Over two weeks, a group of 12 university administrators from across the United States met with the staff of the Japan

Fulbright office; the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT); visited eight different universities; and attended a presentation on the job market in Japan by the firm Recruit.

I learned more about higher education in Japan and gained insight into how to encourage American students to consider Japan as a study, internship, or research destination. At the same time, we learned about the efforts of various universities and the Japanese government to encourage Japanese students to study abroad and to draw more foreigners to Japan.

The Fulbright IEA program gave us an overview of the governmental and institutional structures and initiatives in place to facilitate cross-cultural exchange, while also helping us understand some of the cultural and logistical obstacles that have hindered students in each country from studying overseas.

I was able to complement the more meta-level perspective of the Fulbright IEA program with visits to Kobe College and time with friends and former students. Since teaching at Kobe Jogakuin from 1997-2000, I have stayed in contact with a number of graduates. These young women are now in the workforce, advancing rapidly toward their professional ambitions and goals.

During conversations with these former students, I was struck by their accomplishments. Kobe Jogakuin alumna are achieving real success in the workplace and becoming leaders in their fields, as researchers in the top universities, as lawyers in major law firms, as employees in top pharmaceutical companies, and as professionals in the Big Four accounting firms. A Kobe Jogakuin education set them up for their careers of choice.

Moreover, the English education these students received has stayed with them and is a skill that they have leveraged to their great benefit. I was so impressed by the ability of my former students to communicate with me in English, even if they aren't using that language regularly in their work or daily lives. But I was also struck by how many of them had capitalized on their fluency to advance their careers. One graduate travels often for her company because of her language skills; another has just received a highly competitive post-doctoral fellowship to do research at Harvard University. For them, English is truly a practical skill and was never just an academic subject.

My experiences with the Fulbright program and in reconnecting with students gave me renewed inspiration for the work done by KCC-JEE. Our internship program helps Kobe College students practicing using English in the workplace, in preparation for future work opportunities. Our Gottschalk teacher program continues to send strong teachers to Kobe Jogakuin to educate the next generation of students. And programs like the High School Essay Contest and Graduate Fellowship provide the chance for American students to advance their Japanese language skills and deepen their knowledge and understanding of Japanese culture so that they can operate successfully in both countries.

This summer, I felt so grateful to be a part of an organization that contributes to stronger ties between the U.S. and Japan and prepares our youth for the 21st century.

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (Kobe College Corporation) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCCはその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆をしてくださったのは、1997年4月から2000年3月まで Gottschalk Teachers (中高部英語教員) として神戸女学院で教鞭を取り、現在は KCC 副会長をお務めくださっている Ms. Jeanne Sokolowski です。]

アメリカと日本の絆のために

KCC-JEE 副会長
ジーン・ソコワスキー

今年の6月、私は国際プログラム担当の助成を受け、来日しました。2週間あまりの日程でアメリカの大学12校の担当者が集まり、日米教育委員会 (フルブライトジャパン) の事務所で文部科学省の職員と会合したり、日本の大学8校を訪問したりしました。また、リクルート社から日本での就職活動状況について説明を受けたりしました。

私は、今回のプログラムを通じて日本の高等教育について深く学び、どのようにしたらアメリカの学生が留学先として、インターンシップ先として、あるいは研究対象として日本を選ぶのかという課題を考察しました。それは、現在日本の大学や政府がたくさんの学生を海外留学させたいと考えていると同時に、たくさんの外国人留学生を受け入れたいと考えていることがわかったからです。

海外留学を促進するための取り組みとしては、政治上あるいは制度上ではうまくできていると思います。しかしながら、実際に留学する学生にとっては、海外に住みながら文化的あるいは物理的なあらゆる困りごとを解決しながら勉強をしなければならないのです。

これらのことは、神戸女学院でのかつての教え子たちと再会したことでわかるようになりました。私

は1997年から2000年に神戸女学院で英語教員として教鞭を取っていました。現在も、たくさんの卒業生たちと連絡を取り合っています。彼女たちは、今は立派な社会人となり、プロフェッショナルとしてそれぞれの夢や目標にぐんぐんと近づいています。彼女たちと話をすればするほど、その意識の高さに驚かされます。彼女たちは、神戸女学院の卒業生として様々な職場で活躍しています。大学の研究者として、大きな弁護士事務所の弁護士として、薬品会社の従業員として、四大監査法人の監査人として、率先して業務を行っています。神戸女学院の教育は、彼女たちのキャリア選択においても、とても役に立ったと感じています。なんといっても、神戸女学院の英語教育は、彼女たちの類まれな技能となり、大きな成果をもたらしています。仕事や生活で日常的に英語を使う機会はほとんど無いにも関わらず、私との会話はとてもきれいな英語でした。それは、彼女たちが自身のキャリアのために、たゆまぬ努力を続けているのからなのです。ある卒業生は、よく仕事で出張を任せられるらしいのですが、それは彼女の語学の技能が高いと認められているからです。またある卒業生は、大変競争の激しいハーバード大学におけるポスドクの給費研究員の地位を獲得したばかりです。このことから、英語は学習科目としてだけでなく、実践的な技能になっているといえるでしょう。

今回のプログラムに参加したり、卒業生に再会したりしたことは、私の KCC 理事としての仕事にも新たな発見をもたらしました。Internship program では、大学生が職場で英語を使う実践的な場となり、将来、仕事をするときの練習になります。Gottschalk teacher program (中高部英語教員派遣プログラム) では、アメリカで優秀な教員を選出し、神戸女学院へ送り出し、中高部生徒への教育を充実させています。High School Essay Contest や Graduate Fellowship では、アメリカの学生の日本語の技能を上達させたり、日本文化をよく知ってもらう機会をつくりだしたりしています。これらの活動は、アメリカと日本の両国間において、とてもうまくいっていると考えられます。

この夏、私はアメリカと日本がより固い絆で結ばれる一端を果たせたことをとても嬉しく思っています。これを21世紀の若い世代に引き継げるよう活動を続けたいと思います。

学院リトリート報告

暑さも本番を迎えた中、7月28日(金)に学院リトリートが行われました。学院リトリートとは、学院の教職員が集い、キリスト教や建学の精神について学ぶことを目的としたプログラムです。

今回は、神戸女学院の設立の原点のひとつである日本基督教団摂津三田教会から、西脇正之牧師をお招きし、「九鬼隆義とキリスト教～三田から神戸へ～」と題してご講演いただきました。明治という激動の時代において、九鬼隆義をはじめ彼を取り巻く人々が、積極的に新しい文化を受け入れ、学び、実践したことをご教示くださいました。タルカット先生およびダッドレー先生は、隆義の依頼で三田での女子教育を行うなど、神戸女学院との関わりの原点が窺えます。彼が神戸に移住した後もその姿勢は揺るがず、キリスト教や教育への支援に尽力しました。神戸に蒔かれた小さな種は、三田の人々の働きがあって大きな実を結んだと言えるでしょう。

ご講演を踏まえ、会の後半にはグループごとに意見や疑問を共有し、大変有意義なひと時を過ごすことができました。さらに開会礼拝では摂津三田教会から神戸女学院に寄贈していただいたD.C.グリーン牧師の説教台を使用いたしました。学院の建学の精神を見つめ直し、生徒、学生のみなさんに奉仕する者としての思いを更に深くすることができるよう、神様の祝福が豊かにありますよう心よりお祈りいたします。

日 時：2017年7月28日(金) 14:00～16:00

場 所：H301教室

参加者：105名

講演：西脇 正之 氏 (摂津三田教会牧師)

開会礼拝：飯 謙

全体司会：中野 敬一



西脇正之牧師のご講演

2017年度 宗教強調週間

プログラム

(11月6日～11月10日)

- 11月6日(月)
 早天祈祷会 文学部 総合文化学科 3年生
 中高部礼拝 学院チャプレン 中野 敬一
 チャペルアワー 中野 敬一
- 11月7日(火)
 早天祈祷会 高等学部 3年生
 中高部礼拝
 「これからのきみたち」 関西学院院長 田淵 結
 チャペルアワー
 「かみさま あのね」 田淵 結
 全教職員礼拝
 「やまべにむかいて」 田淵 結
- 11月8日(水)
 早天祈祷会 文学部 英文学科 4年生
 中高部礼拝
 「『平和をつくり出す人たち』～心の中に平和を」 被爆証言者 近藤 紘子
 チャペルアワー
 「『平和をつくり出す人たち』～心の中に平和を」 近藤 紘子
 中高部 PTA のための宗教講話
 「『平和をつくり出す人たち』～心の中に平和を」 近藤 紘子
 学生寮 夕拝 「共に苦しみ、共に喜ぶ」 日本基督教団西宮一麦教会牧師 橋本いずみ
- 11月9日(木)
 早天祈祷会 高等学部 3年生
 中高部礼拝
 「自分のこと好き？嫌い？」
 「聖書が教える自尊感情」 同志社大学社会学部教授 木原 活信
 チャペルアワー
 「いいね！承認欲求の裏にあるもの」
 「聖書が教える自尊感情」 木原 活信
 同窓生のための宗教講話
 「自分を大切にできる力」
 「弱さの向こうにあるもの」 木原 活信
- 11月10日(金)
 早天祈祷会 人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 2年生
 中高部礼拝 音楽礼拝 中高部生徒・喜多 牧子

アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」

ヘンデル メサイヤより

《シオンの娘よ、大いによろこべ》他

大学院 音楽研究科1年

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、関西学院院長田淵 結氏、広島原爆の語り部として各地でご講演されている近藤紘子氏、同志社大学社会学部教授であり日本キリスト教社会福祉学会会長を務めておられる木原活信氏、以上3名の先生を講師としてお迎えしました。

7日(火)は田淵 結先生が「かみさま あのね」と題してお話してくださいました。「主の祈り」を通して、祈りとは神様とのコミュニケーションであること、そして、自分自身だけでなく隣人を思う大切な時であることを語られました。祈りを通して、様々な人に出会い、神様に出会うこと、私たちが祈ることの大切さに気づき、神様と共に歩む一人一人であることを教えてくださいました。

8日(水)は近藤紘子氏が『「平和をつくり出す人たち」～心の中に平和を』と題してお話してくださいました。近藤氏は生後8か月の時に広島で原爆の被害に遭われました。以来、原爆を投下した人たちのことを憎み続けておられましたが、10歳の時、「エノラ・ゲイ」の元副操縦士ロバート・ルイスとの出会いにより、彼の言葉と涙に、憎むべきはずと憎んでいた私の心の中だと気づかされた人生を語られました。戦争も平和も真実は常に自分自身の中にあること、心の中に平和を、そして次世代の私たちに平和を作り出す人になって欲しいという願いを込めたメッセージをいただきました。

9日(木)は木原活信先生が「いいね！承認欲求の裏にあるもの—聖書が教える自尊感情—」と題してお話してくださいました。ご自身の経験や讃美歌493番「いつくしみ深い」を通し、人間は相手の存在をありのまま受け入れることが大切であるということ、また、大学生にわかりやすいよう、インスタグラムのスタンプ「いいね」を例えに、現代人は承認欲求が高いことを語られました。聖書（見失った羊のたとえ話）を通し、神様は絶対に私たちを見捨てないというイエスの愛についても語られました。失われたものを探して救うために神様が「いいね」というスタンプを押しに来られた。一人一人が神様に受け入れられ、誠の愛を知ったものとして互いに愛することができるようにと祈りを込められました。

7日の全教職員礼拝では、田淵 結先生に励ましのメッセージをいただきました。また続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若

き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

ご多忙の中お越しくださり、一日に多くの講演をしてくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャペレン室)

＜中高部礼拝＞

11月6日は中野敬一学院チャペレンに「神に倣う者となりなさい」という題で説教をしていただきました。神に倣うということは、神に倣って与えることであり、その模範として私たちにはキリストと、またキリストに倣って生きる人々が与えられているというお話でした。7日は田淵 結氏に「これからのきみたち」という題で説教をしていただきました。田淵先生は、人生には向こう側に残された領域があるということ、分からない、理解できないとしてきた領域が残されているのだということをお話してくださいました。そして、知的な営みと祈りという信仰の営みによって神に問い続けることを大切にしたいと語ってくださいました。8日は近藤紘子氏に「平和をつくり出す人たち～心の中に平和を～」という題で奨励をいただきました。広島に投下された原子爆弾によって日常を奪われた一人として、復讐心のようなものを抱いていた近藤氏は10歳の時にエノラゲイのパイロットと会った時に、「憎むべきは戦争そのものであり、戦争を起こそうとする一人ひとりの心にある悪なのだ」と悟ったそうです。「世界を変えることはできないかもしれないが、一人ひとりに伝えてゆくことはできる。平和を願い、希望をあなたがたに委ねます」という言葉が印象的でした。9日は木原活信氏に「聖書が教える自尊感情」という題で奨励をいただきました。現代の日本の若者の傾向として自尊感情の低さや承認欲求の高さが指摘されているが、神がその独り子をこの世に遣わされた愛、キリストが人を救うために十字架へと歩まれた愛を受け入れることができれば、他人の評価や承認などというものは小さくされてしまうのだというお話に大きな励ましを得ました。

早天祈祷会では7日にS3の白井萌陸さんが、9日にはS3の大嶋祐璃さんが奨励を担当してくださいました。有志の祈りでは、生徒たちからも祈りがささげられました。

また中高部では放課後にも「白熱教室」と題して特別プログラムを実施いたしました。6日は自治会主催の「ジョガトーク!!」、8日は近藤紘子氏、9日は森 孝一院長、10日は卒業生を講師として語らいの時を守りました。

(中高部チャペレン)

史料室の窓(44)

Herstory of Kobe College

— もう一つのhistory —

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

皆さんはNHKで放映されている「ファミリー・ヒストリー」という番組をご存じでしょうか。芸能人のルーツをたどる番組で、NHKらしい綿密な取材の下に構成されています。

先ごろ放送された「ファミリー・ヒストリー」に神戸女学院が登場したのですが、ご覧になったでしょうか。8月17日放送の「オノ・ヨーコ」の回です。オノ・ヨーコさんのお祖母様に当たる小野(旧姓・税所)鶴さんが、神戸女学院創立者・タルカット先生(Miss Eliza Talcott)の影響で神戸女学院に入学したこと(卒業はされていませんが)、その後、タルカット先生が活動拠点としていた京都看病婦学校(同志社)で先生のお手伝いをし、その縁で、お祖父様となる小野英二郎氏と出会った、ということが紹介されていました。NHKの物語はその後、お祖父様、お父様にスポットを当て、近代日本における2人の活躍と、オノ・ヨーコさんの活躍へと続いてきました。時間と空間を越えた壮大な話は見るものを引き付ける見ごたえのあるヒストリーでした。

ところで、そもそも小野 鶴さんと神戸女学院との関係を知るきっかけになったのは、小野家のルーツを調べておられたお孫さんに当たる小野有五先生(北海道大学名誉教授、北星学園大学教授)からのお問い合わせでした。史料室では鶴さんの在籍確認を行ない、その後の鶴さんと学校とのかかわりを調べました。そして鶴さんが卒業されていないにも関わらず、同期生として同窓会に連なり、同窓会活動に熱心に参加されていた様子が資料から浮かび上がりました。小野先生のお話から、鶴さんの結婚にあたって、タルカット先生がサイン入りの写真を贈っていただいたこともわかりました。2人の間には強いきずながあったのです。鶴さんが神戸女学院との関係を大切にされたのはそのためだったのでしょうか。小野先生のお問い合わせから日を置かず、NHKから取材の申し込みがありました。不思議なご縁を感じます。

そして神戸女学院では、その時のご縁で、オノ・ヨーコさんのいとこにあたる小野先生をお招きして、講演会を持つことができました(9月30日)。こちらは、タルカット先生に導かれた小野 鶴さんから始まる小野家の女性の物語でした(鶴さん以降の女性については、神戸女学院とは直接関係はありませんが)。NHKがfamily historyなら神戸女学院でのお話はfamily herstoryと呼べるものだったのではないのでしょうか。表看板として世界で活躍する男性の物語は確かにドラマティックです。ですが、表にあらわ



Miss Eliza Talcott

れず、派手さはないかもしれませんが、地道に脈々と波打つ人間ドラマという点では、戦前の女性のダイナミックな生き様がそこにありました。history (his story) と her story は並行して語られることはあまりないと思いますが、今回、2つの history が語られました。

神戸女学院の歴史を繙いてみると、この学校の卒業生にはいわゆる「有名人」がたくさんいるわけではありません。しかし、世の中の土台の部分で人を支える役割を担い、表にあらわれずとも人々に知られた「知名人」を多く社会に送り出しています。professional (専門家・知識があると主張する人)ではなく、隠れた expert (達人・豊富な経験のある人)が多いのです。創立時からミッションスクールとしての学校が目標にしているのは奉仕する人の養成でした。タルカット先生から始まる学校の歩みは、その精神を受け継いだ人々が守り伝えてきたものです。

小野先生は講演の最後に「タルカット先生がいなければ、鶴は英二郎と出会わなかった。この出会いがなければ、今、私たちはここに居ない。神様はその時その時にふさわしいものを用意してくださる。私たちはそれを信じて、安んじて生きていける。」というメッセージを残されました。

まさに“He has made everything beautiful in his time.”(コヘレトの言葉3章11節)

これまでの先人の歩みを覚え、私たちがまた、それに続いて、神戸女学院の herstory の一員になりたいと思うものです。

<キャンパスお気に入りの場所>

春のグラウンド情景
～四季折々の中で～

4月、新年度が始まり入学式・始業式を迎えると、グラウンドでの記念撮影が行われます。西には西宮のシンボル甲山と六甲山系が広がる絶景で、グラウンドの周りには桜が満開に咲き誇る見事な光景が広がります。都会の殺伐とした喧騒や雑踏な環境とは違い、四季折々に人の心を感動させ、共生する動物たちの憩いの場としても、自然の豊かな恵みを常に堪能させてくれる全てに最適な環境を与えられた事に、只管感謝するばかりです。

日本女子サッカー界の先駆的役割を担った1966年秋結成された女子サッカー部、当時から練習に励んだグラウンドの芝生の整備も今は少々必要かなと思ひ、さらに岡田山に移転して80年以上が経過していることで、さらに当時植樹されたソメイヨシノの木々の寿命も一斉に近づいて来ているともささやかれる中、学院として計画的な植生環境整備の時期が到来しているのかも知れませんね。

気候も良くなり、お昼時はお花見をして団欒をする生徒たちや、小さなお子様と一緒にお花見をする近隣のお母様方の姿もあり、心が和む光景が広がります。

このような類ない恵まれた自然環境の中に存在し、142年に及ぶ歴史と伝統の重みに加え、2014年に国の重要文化財にまで採択された老舗の学び舎で、既に34年の年月を仕事として関わらせていただき、あと残された時間でどれ程の貢献ができるのかなと、その使命の重さと大切さを、この機会に改めて痛感しています。

(中高部事務室)



穏やかな陽射しを浴びて

谷門と坂道

谷門には、「神戸女学院」の文字が深く彫り込まれた石柱が立っています。これは1894年（明治27年）、校名改称時に神戸山本通の正門に建てられたもので、1933年（昭和8年）、キャンパス移転時に現在の位置へ移されたそうです。

私の自宅から岡田山に向かって徒歩15分、神戸女学院への入口は始めからずっと谷門でしたので、広いスロープとモダンな正門を見た時にはとても驚きました。

山が近づいてくると、野鳥たちのさえずりが聞こえてきて、私を谷門へと導いてくれます。足を踏み入れるとそこは木立に覆われた森の中。天气が悪ければ長い坂道が続く薄暗い空間、太陽が岡田山を照らせば木洩れ日と緑のとても美しい場所です。

ふとここで出会った生き物たちのことを思い出しました。タルカッタ記念館のガラス窓で失神したフクロウ、巣から落ちたツバメの雛、ケンウッド館の屋根裏に棲みついたイタチ、宣教師の先生の居室で出産した野良猫…。出会いの驚き、喜びもあれば悲しみもありました。

今秋、再び数年ぶりに自分の足で通えるようになり、思わずこの場所にひとりたずむと不思議に勇気を与えられ、生かされていると感じました。

あらためて見る2本の石柱はずっしりとして神戸女学院の歴史を物語っています。今日も学生生徒の皆さんが谷門を歩いて坂道を上っていきます。学び舎へと誘う一本の坂道。ここは生き物たちを育み、私たちの命を守り生かすかけがえのない場所なのです。

(学生生活支援センター)



谷門

大学報告

大学生が考える防災 ～大学で被災したら～

人間科学部 心理・行動科学科 3年生

2011年に発生した東日本大震災を受け、当時のNCP（西宮市大学交流協議会大学連携学生プロジェクトチーム）メンバーが学生の本分である勉強を続けながらできる支援は何かと考え「西宮にしながらできる支援」をコンセプトとし、西宮から被災地への復興メッセージを送り届ける、仙台七夕プロジェクトの企画・運営を行ってきました。先輩方の思いを受け継ぎ活動は7年目を迎えました。

今年は、新たにより幅広く震災について考えようという思いから、一日の大半を大学で過ごす学生ができることについて「大学で被災したらどうする？」をテーマにワークショップを開催しました。そして、多くの大学生と共にワークショップや講師の先生方の講演を通し、震災時にどのような行動をとるべきかを学ぶことができました。

私たち自身、大学内で被災した時にどのような行動をしたらよいか知りませんでした。教室にある防災マニュアルを活用し避難すればよいと考えていましたが、マニュアルに書いてある情報は古いということに驚きました。例えば、ガラス飛散防止のためにカーテンを閉めることは、あまり意味がないそうです。揺れが収まったら避難をするため、ガラスが割れた後にカーテンを閉めても人が戻ってくることはないからだそうです。このことは、ワークショップに参加しないと分からないことでした。

今回のプロジェクトで学んだことを今後、起こりうる震災につなげることができればと思いました。



ワークショップの様子

初めての学会発表を終えて

人間科学研究科博士前期課程

私は、2016年の4月に神戸女学院大学大学院人間科学研究科博士前期課程に入学し、「酒粕素材が前駆脂肪細胞の分化に及ぼす影響について」というテーマで研究に取り組んでいます。

近年、我が国では食の欧米化が進み、食生活が植物性食品から動物性食品中心へと変化したことや、生活習慣や社会環境の変化に伴い肥満者が増加し、それに伴う糖尿病などの生活習慣病患者数の増加が社会問題となっています。このような問題を解決する手段として、清酒醸造の副産物である酒粕の機能性に着目し、酒粕素材の脂肪細胞に対する影響について研究を進めています。

私はこれまでの研究成果をまとめ、2017年5月19日～21日に沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開催された、「第71回日本栄養・食糧学会大会」にて成果報告を行いました。私にとって初めての学会発表でしたので、発表時は大変緊張しましたが、質疑応答では様々な視点からご指摘をいただき、また多くの方々と交流を持つことができ、大変やり多き時を持つことができました。

今回の学会発表において、共同研究をしていたいるヤエガキ醗酵技研(株)の研究者の方々にご指導を賜り、研究の厳しさと楽しさを知り、さらに発表後には大きな達成感を得ることができました。このような学会発表という貴重な経験を活かし、今後も研究に邁進していきたいと考えています。

プロジェクト科目（インド実習）の取り組み

総合文化学科のプロジェクト科目「フィールドで学ぶ現代インドの諸問題」では、学生16名（総合文化学科2年生15名、英文学科2年生1名）と引率教員2名（北川将之、與那嶺司）が、今年8月下旬から9月上旬の8日間、本学協定校のセント・ジョセフ大学から協力を得ながら、インド南部の都市バンガロールと近郊の農村でフィールドワークを実施しました。

出発前の集中講義では、北川（インド政治研究）がインドのカースト差別や児童労働などの諸問題について、與那嶺（社会福祉学）が日本における重度障がい児のケア、視覚障がい者の自立支援について、外部講師を交えて授業を行いました。現地では、ストリートチルドレン保護施設、マザーテレサ施設（重度障がい児保護）、視覚障がい児の私立学校、農村貧困女性の自立活動（マイクロファイナンス）の支援施設、チベット人学生寮等を訪れて、多様な社会文化的背景をもつ人々と触れ合いました。

本学協定校のセント・ジョセフ大学では、カースト差別・女性差別は正へ向けた意識向上キャンペーンの例として、農村の子どもたちにわかりやすい寸劇のパフォーマンス（Street Play）を実演してもらいました。また、今年度は北川隆行・在ベンガルール日本国総領事との談話会を開催させていただく機会を得ました。総領事との対話を通して、学生たちはインド特有の文化社会的側面（カースト制度等）の理解を深めることができました。

（総合文化学科准教授 北川 将之）



セント・ジョセフ大学での学生交流

「神戸女学院の100冊」書評コンテスト

「神戸女学院の100冊」とは、2014年度に本学のリベラルアーツ&サイエンスプログラムがスタートした時に、副専攻プログラム（2017年度からはマイナープログラム）の19分野から、それぞれの学びの道標として選ばれた推薦図書を集めたものです。

2015年からは、学内外に向けて神戸女学院大学のリベラルアーツ教育を浸透させることを目的として、「神戸女学院の100冊」書評コンテストが始められました。3回目の2017年度は、大学生部門5作品、高校生部門67作品が寄せられ、最優秀賞2作品、優秀賞3作品、佳作3作品が選ばれました。優秀賞のうち大学1年生が英語で書いた1作品には学長特別賞が合わせて贈られました。

11月3日には表彰式が行われ、各賞受賞者5名が出席し齊藤言子学長より賞状と副賞を授与されました。各受賞者からの挨拶に続いて、審査に当たった教員からそれぞれの書評についてコメントが発表されました。式の最後に受賞者と出席者は懇談の時を持ち、書評コンテストや学校生活などについての話がはずみました。

詳しくは、「神戸女学院の100冊」書評コンテストのサイトをご覧ください。講評及び最優秀作品と審査員のコメントは全文を掲載しています。

（大学事務長）



「神戸女学院の100冊」書評コンテスト表彰式

ウラジミール マラーホフ氏による公開講座

去る7月12日、14日の両日に、世界的バレエダンサーのウラジミール マラーホフさんが、音楽学部舞踊専攻の学生のために公開講座を行いました。マラーホフさんは、同月の27日に大阪 NHK ホールにて開催された Dance at Gathering の公演における舞踊専攻島崎教授振り付けによる作品に、針山愛美客員教授と共に出演するために来日し、エミリー・ブラウン記念館にて約3週間リハーサルをされました。尚、この公演には、舞踊専攻の卒業生、研修生をはじめ、本間紗世非常勤講師も出演されました。

(音楽学科教授 島崎 徹)



第7回関西の音楽大学オーケストラ・フェスティバル in 京都コンサートホール

2017年9月24日、関西の音楽専攻大学8大学から選抜された学生によるオーケストラと合唱団の演奏会が行われた。本学音楽学部からは、器楽専攻の学生13名がオーケストラに、声楽専攻とミュージック・クリエイション専攻の学生5名が合唱に参加。曲目はモーツァルト：レクイエム、レスピーギ：交響詩「ローマの噴水」「ローマの松」。指揮者秋山和慶氏による指導の下、学生たちは9月から練習を開始。1500名を超える観客の前で熱演。終演後、学生たちの顔は充実感溢れる表情に満ち溢れた。

(音楽学科専任講師 松浦 修)

<留学生紹介>

Welcome to Kobe College

2017年度、新たに6名の留学生の方々を本学に迎えました。前期4月から7月にかけてはフィリピン・アサンプション大学より初の受入となる2名が来学され英文学科と総合文化学科にそれぞれ所属されました。

後期からは、中国・広東外語外貿大学から1名、米国・ボーリンググリーン大学から1名、韓国・梨花女子大学から1名の合計3名が総合文化学科に所属し、日本語の講義に加え、それぞれの専攻に応じ社会学、言語学、Global Studiesなどを学びます。加えて、留学生を対象として英語で日本文化を学ぶ Introduction to Japanese Culture と日本の現代事情を学ぶ Current Issues in Japan の2科目（ともに本学学生も受講可能）などを受講しています。また、同じく後期から中国・広東外語外貿大学大学院の1名は本学大学院文学研究科で修士論文の完成を目指して学んでいます。

留学生の方々は、本学学生が留学生をサポートする“留学生バディ”制度を通じ、西宮神社でのお祭りに参加されるなど、早速交流を深めています。

皆様にも、留学生たちの本学での生活・勉強がより充実したものとなるよう、様々な場面でご協力いただければ幸いです。

(国際交流センター)



<留学生自己紹介>

My Home in Japan

アサンプション大学交換留学生

When I received the news that I will be one of the first students to be sent to Japan for the Exchange Program, I had mixed emotions. First, I was very excited. It is a new country, culture and most importantly new friends to make. At the same time, I was also very nervous. To be one of the first representatives of my college was enough pressure for me, let alone representing my country. When I arrived in Kobe College, the pressure and the nervousness all disappeared. Kamiru-chan and I were welcomed with so much hospitality that we almost instantly felt like it was home. We made a lot of Japanese friends right away and we immediately learned how to truly live like a Japanese person. This experience has taught us so much from learning and living an entirely new culture to exploring the rich cultural heritage that Japan has to offer. I must say that we enjoyed wearing the Yukata, relaxing in the Onsen, singing Karaoke with our friends, eating Karaage and many more. Now that we are back in our home country, The Philippines, we are looking forward to returning to Japan and Kobe College to meet the friends that we have made and so that we can further broaden our knowledge about the culture that we have learned to love.

It's All About the Memories

アサンプション大学交換留学生

I'm ever grateful to be a part of this exchange student program. Generally, Japan really changed my life. Kobe College became my second home that I would always want to visit. We all know that being thousands of miles away from home was not always easy, but Kobe College never let us feel that we were alone. The hard times helped us grow up and move away from our comfort zone to gain maturity and independence.

We met a lot of amazing friends that we know we would treasure for a long time. They gave us valuable experiences that taught us how to embrace diversity and become more aware on how to adapt to different environments. They allowed us to get to know and appreciate every single aspect of Japan life and its great culture.

Also, the students and teachers helped us to overcome all the circumstances that we have encountered and took consideration whenever we did not understand something. Overall, this exchange student program made me realize that I can do so much more than I ever thought was possible. I would like to take this opportunity to thank Kobe College for giving me the best time of my life and I can't wait to see you all again.

<派遣留学報告>

ロックフォード大学

ロックフォード大学で学んだこと

文学部 英文学科 3年生

昨年の8月から今年の5月中旬まで、アメリカのイリノイ州にあるロックフォード大学に派遣留学をしていました。ロックフォードはシカゴに次ぐイリノイ州第二の都市です。ロックフォード大学では、国際関係学、心理学、倫理学、政治学など、様々な授業を履修しました。どの授業も簡単ではなく、授業についていくことに必死だったのを覚えています。毎日出されるリーディング課題のために、夜遅くまで図書館にこもったり、エッセイの添削してもらいにチューターさんのもとへ通ったりと、毎日忙しくも充実した日々を過ごしていました。勉強だけでなく、現地の友人や、世界各国から集まる留学生とともにクラブ活動を行ったり、週末は買い物に行ったりと現地での生活も思いっきり楽しみました。

色々な背景を持つ友人と接することで、自分が今まで持っていた固定概念や先入観といったものがなくなっていくのを実感しました。そして今まで以上に柔軟に、あらゆる角度から物事をとらえることができるようになりました。それと同時に、いくら背景が違って人もみな同じ人間であり、困った時には助け合い、辛い時には一緒に泣いて、楽しい時には一緒に笑うなど、色々な瞬間を共有することで、一生の友人になることができました。そのような素晴らしい経験や出会いのすべては派遣留学をする際にサポートしてくださった神戸女学院大学の皆様、家族、友人のおかげです。本当にありがとうございました。



学内のメキシカンフェスティバルにて

ワイオミング大学

留学で学んだこと

文学部 英文学科 3年生

今年5月までの約10か月間、ワイオミング大学に留学していました。ワイオミングは全米50州のうち10番目に面積が大きいのですが、人口はなんと最小です。大学のまわりもいなかで、日本人はあまりいません。そのような環境で、英語をうまく話せない私が、本当に一人でやっていけるのか最初はとても不安でした。

しかし行ってみると、現地学生や留学生、先生方も皆、困ったことがあるといつでも力になってくださり、不安な気持ちがすぐに新しい生活への楽しみへと変わりました。様々な国からの学生と知り合ううちに、価値観や考え方が大きく変わりました。例えば、外交上日本とあまりよくない関係にある国々からの留学生も、政治のことなど関係なく親切にしてくれ、自分がそういった国々に少なからず偏見を持っていたことを恥ずかしく思いました。

またアメリカの大学生は、自分の意見をしっかりと持っています。特に大統領選のときはよく白熱した議論を交わしていました。そういったとき、意見を求められてただ「わからない」ではなく、自分で考え、間違えてもいいからとにかく伝えることが大切だと感じました。

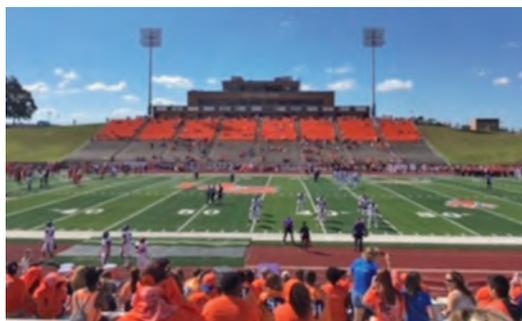
この留学で、語学力だけでなく、たくさんのことを学び、また精神面でも大きく成長することができました。大変なこともありましたが、そのすべてが良い経験です。支えてくださった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

サムヒューストン大学

沢山成長した留学生活

文学部 英文学科 3年生

サムヒューストン大学での留学で最も培ったものは自立心でした。私が第一期の派遣留学生だったため他の大学への留学とは違い、先輩からの経験談やアドバイスなどはなく、自分で学校やテキサスについて調べました。留学先では寮でルームメイトと2人暮らしでした。親元を離れ生活するのは初めてでした。寮にはキッチンがあったためカフェテリアを利用するよりは、自炊がメインでした。自炊するにも、材料を買いに行くスーパーマーケットは寮から徒歩20分以上のところがありました。ルームメイトは私と同じ留学生でどちらも車を持っていなかったため、共に何回も重い荷物を持ちながら買い物を頑張っていました。日本人留学生は私だけで、日本語を話す機会はゼロでした。私にとってはその環境の方が英語力があげることができるので良かったです。最初の方は言葉の壁が大変なときもありました。勉強面では課題が日本よりも多く、ある授業では初めて英語で約10枚のレポートを作成しました。その課題を出されたときはできるのかという不安でいっぱいでしたが、レポートが完成したときの達成感が今でも忘れられません。ずっと憧れていたアメリカでの留学生活は楽しいことよりも大変なことの方が多かったですが、そのお陰で沢山成長できた気がします。どの経験も人生において必要なものばかりなので、これからに活かしてますます成長していきたいです。



アメリカンフットボールの試合にて

イーストアングリア大学

かけがえのない出会いと思い出

文学部 英文学科 4年生

2016年9月から9ヶ月間のイーストアングリア大学での学びは私にとって、何にも代えがたい貴重な経験と思い出になりました。

家族と離れて暮らしたことは生まれてこの方なく、行ったことのある外国はアジアだけ、一週間以上の海外生活の経験は無し。文字通り「飛び込んで」いくような形で始まった留學生活、初めは右と左どころか上も下も分からない慣れないことばかりで大変でした。特に授業は予習復習に時間をかけなければならず、講義が終わって図書館に行ったら一日が終わっていたなんてことも。

それでも段々と友達が増え、その子たちと一緒に過ごす時間も自然と多くなっていくにつれて、講義からの学び以上に、彼らとの会話の中から新しい考えや知識を得られるようになっていきました。中でも一番お気に入りだったのは「みんなで夜ごはんを作って食べた後にまったりお喋りする」時間でした。お互いの国の「当たり前」、政治、宗教、家族のこと…。小さな日々の出来事から、日本では減多に話す機会のないようなことまで、日付が変わっても飽きるまで語り合っていました。今でもたまに、あの時間が恋しくなります。

これから自分がどんな人生を送っていくかは分かりませんが、この留学で見たこと・感じたことを忘れずに、しっかり活かして、またこの留学で出会った人たちのところへ、一回りもふた回りも成長した自分になって会いに行きたいと思います。



帰国前に開いてくれたお別れパーティー

詩と批評の専門誌「ユリイカ」平成29年11月号に筆者の詩が掲載されました。

広東外語外貿大学

出会いとイメージの変化

文学部 英文学科 4年生

私は、2016年8月から2017年6月まで広東外語外貿大学に留学しました。留学前は正直中国に対して良いイメージばかりではありませんでしたが、実際に中国を訪れ、自分の知らない中国を知るために、「現地の中国の方々とできるだけ交流すること」を目標にしました。

ある学校周辺の店主が、私の注文をするときの発音を聞いて外国人だと気づいて、話しかけてきました。私は驚きと話すスピードの速さで全く何を言われたのか分かりませんでした。ですが、そのお店に行く度に店主は話しかけてくださって、だんだんと聞き取れるようになり、質問に答えることもできるようになりました。帰国前にあいさつに行くと、彼は「あなたが初めて話した日本人で、日本人に対して悪いイメージの方が多かったが、今は日本人へのイメージが良い方に変わった」と言ってくださり、交流した中国の方の中でも特に、深く印象に残っています。

この留学を通して、現地で生活したからこそ知ることができた習慣や文化があり、たくさんの人との出会いがあったからこそ、実際の中国を知り、中国に対する考え方や印象も変わりました。

最後に、留学をサポートしてくださった職員や教員の方々、そして家族や友人たちに心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



白雲山にて

梨花女子大学

私の留学生活

文学部 英文学科 4年生

私は、2016年8月末から10ヵ月間、梨花女子大学に留学をしました。梨花女子大学の魅力はたくさんありますが、今回は、その中の三つを紹介したいと思います。一つ目は、キャンパスがとても綺麗なことです。季節が変わる度に、私は写真を撮っていました。二つ目は、学校の周りに美味しくて安いお店がたくさんあることです。特に、留学生は外食が多いので、とても助かりました。そして、最後に、留学生がとても多いことです。正確な数字は分かりませんが、約400人から600人の留学生がいます。

私は、国際寮に住んでいたこともあり、寮の中では英語、町の中では韓国語、留学生の友達とは英語、韓国人の友達とは韓国語と常に言語を使い分けていました。授業も、韓国語と英語の両方で受けていました。私は、ルームメイトがドイツ人やフランス人だったこともあり、留学当初から、海外の友達と一緒に過ごすことが多かったです。そして、親友も香港やカナダ、ドイツから来た学生でした。そのため、語学力は自分でも驚くほど伸びました。そして、それと同時にあらゆることを受け入れる心の余裕と日本だけではなく世界にも目を向けいろいろなことを考える力もつきました。留学先でどのように過ごし、何をやるかがとても大切なことだと強く感じました。

このような貴重な機会をいただいたことに心から感謝して、残りの学生生活も頑張っていこうと思います。



梨花女子大学キャンパスにて

カリフォルニア州立大学

忘れることのない夢の10ヶ月間

文学部 英文学科 3年生

私はカリフォルニア州立大学へ留学しました。初めての寮生活と学部留学に不安を感じていました。しかしそれ以上に楽しみの方が大きかったです。

授業はグローバルスタディーを中心に取りました。実際に授業を受けると、内容が聞き取れず、英語力のなさに気づかされました。Globalize Thisでは、難民やジェンダー問題といった国際問題について考えました。多くの現地学生が積極的に発言しており、その度に自分の知識のなさを思い知らされました。この授業はプレゼンやグループワークが多く、参加型授業でした。その分苦労は多かったです。一番成長できた授業でした。平日は課題と復習に追われ、毎日夜遅くまで図書館にいました。平日が忙しい分週末は遊ぶことに決めていました。BBQをしたり、買い物へ行ったりしました。モントレーは夕日がとてもきれいで歩いてビーチにもよく行きました。長い休みはL.A.やニューヨークに行きました。旅行を通して文化や歴史についても触れることができ良い経験となりました。

留学を通して、物事に対する考え方が変わりました。何事も諦めるのではなく、勇気を出して挑戦することの大切さを学びました。違った文化に適應することの難しさも身をもって感じました。留学期間での経験はどれも貴重であり、私を大きく成長させてくれました。今終わって振り返ると夢の中にいたようでした。留学を通して出会えた人たち、支えてくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。



友人の誕生日パーティにて

<語学研修報告>

カリフォルニア大学アーバイン校

UCI 夏季語学研修に参加して

文学部 英文学科 2年生

私は語学研修で人見知りを直したいと思いUCIのプログラムに参加することを決めました。UCIは自分が想像していた以上に広くとても素敵なキャンパスでした。授業は講義というよりディスカッションなどグループになって活動することが多く、はじめは自分が思っていることを英語で伝えることがとても難しく感じました。その時は先生や友達にアドバイスを貰いながら頑張って取り組みました。グループでコマーシャル動画を作る課題が出たときは放課後に残ってそれぞれ案を出し合い、短時間で仕上げないといけない中で良い作品ができ、とても達成感を感じることができました。クラスは日本人の学生の他に中国人、台湾人やサウジアラビア人などの友達もいてたくさんの友達ができとても楽しかったです。ホストファミリーはとてもフレンドリーで私が理解するまで何度も言い方を変えながら私に伝えようとしてくれました。また、ホストファミリーと電話をすることもあり表情が分からないので聞き取ることに苦労しましたが自分の身になったと思います。この語学研修に参加して自分が想像していた以上に貴重な体験ができました。英語で考え英語で発言することの難しさを実感した反面、伝えることができたときの嬉しさや英語で会話することの楽しさを感じるすることができました。語学研修に参加させていただいたこと、そして様々な経験ができたことにとても感謝しています。UCIで学んだことを今後生かして頑張りたいと思います。



UCI キャンパスにて

ヨーク大学

忘れられない一か月

文学部 英文学科 2年生

私は語学研修でカナダのヨーク大学に行きました。カナダに興味があったので行くことが決まった時はすごくうれしかったです。

午前中の授業は神戸女学院大学の学生10人にイタリアやブラジルなど違う国の留学生が混ざりプレゼンや英語での会話を中心に勉強しました。また、中国人留学生に英語で1対1でのインタビューを行いました。1時間程ありましたが会話が弾んで時間が足りないくらいでした。

午後の授業は神戸女学院大学の学生5人と10人ほどの中国人留学生で授業を受けました。私は発音のクラスで発音を練習したりグループプレゼンを行ったりしました。日本人が少ない空間での授業は大変なことばかりで特にコミュニケーションの面は最後まで苦戦しました。

1日中英語の生活に慣れるのは大変でしたが、コミュニティリーダーとの活動はどれも楽しかったです。ナイアガラの滝では目の前はアメリカとの国境という日本では経験できない光景を目の当たりにしました。コミュニティリーダーの方々はとてもフレンドリーでたくさん色々な話をしましたが、その度に英語がもっと話せたらどれだけ違うのだろうかと思うほど悔しくなりました。

カナダでの生活は楽しいことばかりではなく、文化の違いに戸惑ったり言葉の壁にぶつかったり自分の課題が見えました。しかしどれも忘れることのできない私の大切な思い出です。こんな素敵な1か月間は二度とない！と思えるくらい素晴らしい経験と素敵な出会いでした。



ナイアガラの滝

西オーストラリア大学

尊敬、そして変わる

文学部 英文学科 1年生

今回の研修にあたって、ただの長期旅行にならないために荷物などの物理的用意だけではなく、事前に少しオーストラリアの歴史などの知識の準備もしていくことにしました。調べていく中でもっと知りたいという意欲が湧き始め、それと同時に文化に対する「尊敬」も暮らしていくには大切なのではないかと考えるようになりました。そこで私は滞在中に食べ物や生活様式すべてをまず受け入れてみることにしました。実際に現地ではシャワーは3分で浴びる、洗濯は週に1回だけなど日本との違いが数えきれないほどありましたが、そんな日本人には厳しいルールも、オーストラリアに住むホストファミリーの大切な文化です。私の文化を受け入れる姿に気づいてくれたのか、ホストファミリーを含む現地で出会った人々が私自身を受け入れてくれるようになりました。すると私もますます尊敬の念が大きくなり、たくさんの人と関わりたい、依存的ではなく一期一会を大切にしたい関係を築きたいと強く感じるようになりました。これは今まであまり人との関わり合いを大切にできていなかった私にとって、大きな「変化」だと思います。私はまだまだ未熟者ですが、以前より今の私の方が好きだと自信を持って言えます。この研修は私にとってかけがえのない財産です。行くことに承諾してくれた両親、この研修にかかわってくださった皆さんに心から感謝しています。



日本語クラブで知り合った友人たちと

保護者懇談会報告

今年度の保護者懇談会は4回行われました。

まず1年生保護者対象の懇談会が、6月3日(土)家庭会大学部会総会に引き続き、本学院講堂で開催され、出席者は82名でした。学生部長の挨拶と学生主事紹介、共通英語教育、就職状況・就職活動、学生生活、留学に関する説明が共通英語教育研究センター教員、担当職員および本学学生によって行われた後、個別懇談が実施されました。

学外会場は東海地区および中国地区(山口県を除く)在住の全学年保護者を対象に行われました。東海地区の懇談会は7月1日(土)ヒルトンホテル名古屋において開催され、出席者は28組39名でした。また、中国地区の懇談会は7月29日(土)ホテルグランヴィア岡山で開催され、出席者は33組45名でした。いずれも学生部長による開会祈祷、学生副部長による挨拶、学長または学生部長による学事現況報告、キャリアセンター課長による最近の就職状況の説明、卒業生によるピアノ演奏が行われ、昼食(懇談)をはさんで個別懇談が実施されました。

2年生保護者対象の懇談会は、10月28日(土)本学エミリー・ブラウン記念館で開催されました。出席者は46組54名。学生部長による開会祈祷・挨拶、学長による学事現況報告、本学専任カウンセラーによる講演が行われた後、各学科・各部署に分かれて個別懇談が実施されました。

保護者の皆様と教職員が直接懇談し、質問、要望等をうかがう貴重な機会となりました。

(学生生活支援センター課長)



全体懇談会の様子

音楽学部夏期講習会報告

2017年度音楽学部夏期講習会は、7月29日(土)～8月1日(火)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として今年の講習会には153名が参集し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を感じ取っていただく機会になったことと思います。



講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエーション専攻については、聴音、楽典のテスト及び授業と、各専攻教員による個人実技レッスンを実施しました。また大浦春菜先生、城沙織先生、辰村千花先生(いずれもピアノ)、西田真由子先生、奥田敏子先生(いずれも声楽)、蜷川千佳先生(ピアノ伴奏)のミニコンサート、さらに、宗本舞先生(フルート)、城沙織先生(ピアノ)のミニコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。



また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島崎徹教授の特別講座、さらに舞踊専攻生による「ショート・パフォーマンス」が披露されました。



(音楽学部事務長)

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験を行う機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするプログラムから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションを行うプログラムなど、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種のインターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

西宮市（2名）、兵庫県経営者協会／神戸市（1名）／兵庫県警察（1名）、兵庫県雇用開発協会「女子学生のためのキャリアフォーラム2017」（2名）、神戸国際観光コンベンション協会（1名）、堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会／大阪信用金庫（1名）／野村證券（1名）／紀陽銀行（1名）／ホテルニューオータニ大阪（1名）、和歌山県経営者協会／野村證券（1名）／大黒（1名）、福井県経営者協会／SMBC日興証券（1名）、瀬戸市（1名）、徳島県庁（1名）、高知県庁（1名）、関西環境管理技術センター（2名）、三井住友海上火災保険（3名）、大阪シティ信用金庫（1名）、尼崎信用金庫（3名）、姫路信用金庫（3名）、野村證券（9名）、JTB西日本（1名）、名鉄観光サービス（1名）、日本旅行（2名）、ホテルオークラ神戸（1名）、コース・キャリアセンター（1名）、バイリンガル・グループ（2名）、河合楽器製作所（2名）

KCC/KC インターンシッププログラム／Japan America Society of Chicago（1名）、Anderson Japanese Gardens（1名）、Daikin Applied Development Center（1名）

学生のインターンシップに対する関心は高く、5月と6月に行われたインターンシップガイダンスとインターンシップ選考対策講座①②には、合わせて652名の参加がありました。また、アメリカに学生を派遣するKCC/KC インターンシップの説明会、および派遣学生による報告会にも、合わせて60名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精神的な活動を励まし続けたいと考えています。

（キャリアセンター）

<インターンシップ参加報告>

インターンシップ参加報告

音楽学部 音楽学科 3年生

8月下旬、名鉄観光サービス株式会社梅田支店で、5日間のインターンシップに参加しました。旅行会社は、主に窓口業務のイメージでしたが、法人団体向けの支店である為、営業や電話対応が多いのが印象的でした。他の業種でも、自分の想像と違う仕事があるのではないかと視野が広がりました。

内勤では、確認作業が重要でした。旅券や書類に誤字があれば、海外で入国ができません。お客様の中には、修学旅行で初めて海外へ行く方もいます。大量の確認作業ですが、旅行中、何より大事なことです。集中力と手早く正確に作業する大変さを学びました。

営業では、生のコミュニケーションが最も大切だと感じました。こまめに自分の脚で歩き、顧客に会うことが重要です。営業同行で、老人会の代表の方を訪問しました。その際、前回の旅行の感想をお尋ねし、改善案を立て、次の提案をしました。お客様の話を直に聴くことで、信頼感も生まれます。お客様ご不在の場合に、郵便受けに御案内と共に一言添えた名刺をご投函になった社員の方の姿があり、丁寧さを感じました。これらの工夫が、次へ繋がるのだと思いました。

今回のインターンシップでは、実際の仕事を体験できました。職場の方々のお話を聴く機会も多く、私自身が具体的にどんな仕事をしたいか考える良い機会になりました。今まで興味のなかった業種も体験したいと思いました。この経験をこれからの就職活動に活かしたいです。

KCC/KC インターンシップ

文学部 英文学科 3年生

私はアメリカのイリノイ州にある Anderson Japanese Gardens という北米最大の日本庭園で1ヶ月インターンシップを行いました。期間中は、日本庭園の中にあるギフトショップ内でレジ作業を行ったり、在庫の管理をすることが主な業務でした。また、庭園内のツアー業務にも参加することができました。

庭園は壮大で美しく、日本文化の素晴らしさを改めて肌で感じました。同時に日本文化の知識、それを分かりやすく通訳する力が足りないことに気づきました。以降、庭園に点在している建築物についてくまなく覚え日本文化を学び直しました。そうすることで多くの docent (ツアー案内をするボランティア) と知り合うことができ、お互いの文化を教え合うことでよりその知識が深まりました。

庭園のスタッフの方々は私の希望を尊重してくださり、何事にも挑戦させてくださいました。おかげでギフトショップ内だけでなくツアー業務参加にも携わることができ、庭園のシンボルマーク「吾唯足知」の説明と翻訳を記したポスターの製作も行いました。

今回のインターンシップを通し、何事にも挑戦し、積極的に行動することが働く上で必要だということを学び、加えて新しいアイデアを出して自身の積極性を表現することも重要だと思いました。学校生活や就職活動そして、広く見ると人生においても心に留めるべきことだと考えます。今後、どんなに厳しい課題に直面しても、この経験を糧に成長していきたいと思えます。

最後に、現地で出会い、お世話になった方、そしてこの機会を与えてくださった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



Anderson Japanese Gardens のスタッフと筆者

2017年度 SD 研修会

今年度の SD 研修会は、3月に制定されたタグライン「私はまだ、私を知らない。」と、現在進められているブランディング事業について職員個々が共有することを目的に、8月29日(火)の午後、大学・法人の職員55名が参加して行われた。

当日はブランド・マネージャーで本学非常勤講師の吉田ともこ先生を講師にお迎えし、ご講演にワークショップを交えながらの2時間半となった。

ご講演ではブランドの定義、仕組み、コーポレートブランディングの基本構造、そして広報戦略としてのタグラインの持つ意味について、それぞれ非常にわかりやすくご説明いただいた。ワークショップでは「このタグラインをどう思ったか」などをテーマに、グループで意見交換し共有。大人は理解しても若い人にはどうなのだろうか、否定形であることに新鮮さを感じた、人として謙虚な姿勢がキリスト教にも繋がり本学らしい、等の意見が出された。

最後に先生から「ブランディングも全員でそのミッションを遂行しており、全員でブランドを支えている。本学に対する夢と理想と勇気を持って、職員ひとり一人が各部門で頑張ることで、激動の社会の中、各々の人生を切り拓いていくことのできる女性を作り上げていってほしい。」とのエールをいただき、会を終了した。日々の業務に追われる中、少し立ち止まって自らを振り返るとともに、職員同士が互いの思いも知りあえる貴重な機会であった。

(学長室課長)



吉田先生のご講演に聞き入る参加者たち

2017年度大学教授会研修会報告

大学では毎年春と秋の2回、教授会研修会を開催し、教学方針や教育実践について学びあう機会としています。今年度は5月1日と10月11日、それぞれまる一日をかけて行われました。

春季教授会研修会は、「神戸女学院、外へ—中長期計画との関わりで」と題し、本学の社会連携の現状と展開に焦点をあてました。午前中は、まず西田昌司副学長より、大学中長期目標・計画の重点項目である国際化と地域連携強化の展望についてお話いただきました。つづいて小林哲郎教授からは「地域創りリーダー養成プログラム」の実践報告、奥村キャサリン准教授からは「国際化：What, Why and How?」と題した分析と提言がありました。午後は「地域連携の強化」「国際化の推進」の分科会テーマのもとグループ討議をおこないました。専任教員90名、大学職員・法人25名、計115名の皆さまにご参加いただきました。

秋季教授会研修会は「新しい〈3つのポリシー〉と新カリキュラム」をテーマに開催しました。本学では今年度、大学・学部・学科・研究科の新しい3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を公表しました。またその具体化として、全学の新しいベラルアーツカリキュラムも今年度から始動しています。研修会午前の部では、西田副学長から大学3ポリシーと新カリキュラムの意義について、また学科長の先生方からは、新方針に基づく5学科それぞれの新たな取組や課題、学生の学びの様子等について報告がなされました。午後の分科会では「教育理念・教育課程」「教育実践」「キャンパス活性化」「大学院教育」の4つのテーマに沿って議論を深めました。参加人数は専任教員72名、大学職員・法人19名の91名でした。

参加者が学科や職務の違いを超えて、大学の課題にとともに向き合い自由に意見を交わすこの機会は、本学の今後の発展にとっても、また各自の日々の活動にとっても、たいへん意義深いものとなりました。会の準備にご尽力くださったFDセンター（学長室）の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

（FDセンターディレクター）

百花繚乱

岡田山祭実行委員長

みなさま、今年の岡田山祭はいかがでしたでしょうか？ 天気にご恵まれなかったものの、多くの出店・発表団体と多くの関係者様のおかげで両日も大盛況だったように思います。当日多くの方の表情が笑顔にあふれているのを見て、実行委員一同嬉しく感じました。さて学祭が終わったと同時に私たち3年生委員にとっては後輩にバトンを渡す、ということでもあります。みなさまに完成された岡田山祭をお楽しみいただくために3年間実行委員をしてきたのですが、やはり悩み、あきらめようとしたこともありました。それでもやり抜き、たった2日間のために半年以上仕事をしてくれたみんなに感謝しかありません。この文章を書いている今も、準備期間の他の実行委員のことを思い出すと涙がとまらないほどです。私ひとりでは解決できなかったことも、みんなで一緒に悩み、試行錯誤し成し遂げていきました。恵まれていました。私のことを信頼してくれ、指示したこと以上の仕事をしてくれた1年生。少し責任のある仕事を任せられ、戸惑いながらも一所懸命に働く2年生。そして、自分の仕事だけではなく、後輩の指導をしつつ私の心も支えてくれた3年生。2017年度の実行委員は個々が本当に輝いていました。「百花繚乱」とは、彼女たちのことでもあるのです。来年は一体どんな岡田山祭になるのでしょうか。バトンをどう繋いでくれるのか、今から楽しみです。今年以上今まで以上な岡田山祭、今から期待しています。



委員集合写真

大学クローバー賞授賞式

台風の接近により、小雨がぱらつく中、岡田山祭のオープニング（10月20日）に大学クローバー賞の表彰式が執り行われました。大学クローバー賞とは神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、顕著な活動や成績を収めた団体または個人にその栄誉を称えて贈られる賞です。選考は9月29日開催の連絡協議会において、「課外活動報告書」に基づき、連絡協議会委員7名と大学生自治会委員3名の投票により行われました。

今年度の受賞はコーラス部、ラクロス部、学生YMCA、聖歌隊、チアリーディング部の5団体でした。中でもコーラス部とラクロス部は12年連続15回目、学生YMCAは7年連続7回目の受賞となり、日々の熱心な活動が連続受賞へとつながる結果となりました。

表彰式は、皆本めぐみ会会長、小坂体育部顧問、米戸自治会長、山田自治会副会長、吉藤自治会体育部長、清川自治会文化部長同席のもと、白井学生副部長兼文化部会顧問の司会で始まり、飯学生部長から受賞団体の発表の後、斉藤学長より各団体へ表彰状と賞金が授与されると、会場は受賞を称える拍手に包まれました。

今回受賞した団体も、今年度は惜しくも受賞を逃した団体も、今後の更なる活躍を期待したいと思います。

（学生生活支援センター）



表彰式の様子

2017年度めぐみ会賞

めぐみ会では、大学生及び中高部生徒の自主的な活動を奨励するため、神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動を行っている団体を対象とした「めぐみ会賞」を設けています。

本年度の受賞団体は「大学祭実行委員会」と「DEAR ME」です。「大学祭実行委員会」は、神戸女学院らしい伝統や文化を重んじ、在校生や卒業生だけでなく一般の方々、進学希望の受験生が参加しやすい学祭作りに励んでいること、また「DEAR ME」は、「ランウェイの上で夢を描く」をコンセプトに海外の貧困地域の子どもをモデルに採用して「将来の夢や希望を描いてほしい」との願いを込めたファッションショーを開催し、その収益金は現地NPO法人に寄付され、子どもたちの就学支援に使われていることが主な受賞理由です。10月20日に大学祭オープニングの中庭ステージにて、皆本礼子めぐみ会会長が授与いたしました。本年度の学祭テーマ「百花繚乱」にふさわしい個性あふれる神戸女学院生の今後の益々の活躍を願っております。

なお2016年度中高部の受賞団体は「Sコーラス部」と「JS清掃部」でした。2017年度に関しては1月に選考・表彰いたします。「めぐみ会賞」はクラブや同好会だけではなく小さなグループも対象になります。来年度も多くの応募をお待ちしております。

（公益社団法人神戸女学院めぐみ会 副会長）



大学祭にて皆本会長より授与

<私の研究>

いま、モダニズム小説を読むこと

三杉 圭子



私はアメリカ文学の研究をしています。最近では1920年代から30年代に活躍したジョン・ドス・パソスという人の小説を読んでいます。1938年に出版された彼の代表作は『U.S.A.』と銘打たれています。随分と大仰なタイトルで

す。20世紀はアメリカの世紀だと言われていますが、彼はこの作品でまさしく当時のアメリカ社会を包括的に描こうとしました。

20世紀前半に欧米で起こったモダニズムという芸術思潮があります。先進国では世紀の転換期から科学技術の発達に伴い、急速に産業化が進みました。とりわけ都市では消費文化が発展します。そのなかで人びとは新しい時代にふさわしい思想や芸術を模索しました。文学においても作家たちは新しい表現方法を求めているいろいろな実験をしました。ドス・パソスは『U.S.A.』において、新聞の見出しや流行り唄の歌詞、著名人の伝記的スケッチ、虚構の人物の断片的物語、語り手の内面を映した「意識の流れ」など異なる様式を組み合わせました。ジャン・ポール・サルトルは彼を「当代における最も偉大な作家」と呼び賞賛しました。

私たちはいま、情報技術やグローバリズムの発展に伴いめまぐるしく変わっていく時代を生きています。モダニズム文学者の果敢な試みは、変わりゆく時代を生き抜くための創意工夫と批評的なまなざしを与えてくれるように思います。

(総合文化学科教授)

私の研究

小坂 美保



私が現在取り組んでいる研究テーマは、大きく3つある。第1は、日本における近代都市の空間的編成と身体管理に関する研究である。具体的には、日本で最初に都市公園として誕生した「日比谷公園」に着目し、公園を利用す

る人びとの身体がどのように近代化されたのか、また公園が身体の近代化にどのように機能したのかについて歴史社会学的な視点から検討を行っている。明治30年代に開園した日比谷公園は、洋風公園であり、運動場や運動器械が園内施設として整備されていた公園である。日比谷公園の誕生以降、他の公園にも遊具や広場、運動器械が設置されるようになる。公園が都市における運動空間としての機能が付与された意味について研究を進めている。

第2は、スポーツ空間の形成における「聖地」の想像力である。高校野球の聖地が「甲子園」といわれるように、なぜある特定の場所が「聖地」と称されるのかについて、甲子園を事例にスポーツ空間の聖地化について検討している。

第3は、スポーツの平等性に関する研究である。具体的には、スポーツにおける性別問題や技術のドーピングといわれる用具問題を対象に、是非を問うのではなく、なぜそのような問題が発生するのか、そして「何」が問題なのかを明らかにしようとしている。

(体育研究室専任講師)

<ゼミ紹介>

ロマン主義詩人たちの気概

和氣(直田) 節子

ゼミでの中心テーマは、イギリス19世紀前半のロマン主義文学・思想の現代性です。フランス革命後のナポレオン帝政に失望した当時の読者は、対仏戦争、産業革命、農地改革、教育改革、選挙法改正、奴隷貿易反対運動、女性の地位向上運動など、変革の社会に呑み込まれず、自分らしく前に進み続けるための「何か(something)」を文芸作品に求めていました。浅薄な熱狂と愛のない分別の怖さを思い知ってもなお、想像力や言葉、全人的な道德感情の力を信じ、人としてあるべき社会、自然、神、美との繋がりを模索する作品をゼミで読んでいくと、ほのぼのとした温かさが漂ってきます。

現在の3、4年ゼミ生の研究トピックは、グリーン・ライティングとしての『イギリス湖水地方案内』、コウルリッジのワーズワス批評、ロマン主義時代の教育論にみられるルソーの影響、フランス革命とロマン主義文学、宮崎駿作品におけるロマン主義的子供観、J. オースティン作品での権力とアイロニー、日英ロマン主義文学、ターナーやコンスタブルの絵画とロマン主義の詩、C. S. ルイスとロマン主義詩人の祈り、M. シェリー『フランケンシュタイン』批評の比較、キーツによる美の描写などです。毎年、ハロウィーンのカボチャがクリスマス・グッズに替わる頃になると、卒論仕上げに取り組む4年生からの質問内容が一気に濃くなります。教師としても気が引き締まる季節の到来です。

(英文学科教授)



図書館グループ学習室で、資料探し打ち合わせ

環境・バイオサイエンス学科 植物生態学研究室

野崎 玲児

植物生態学ゼミは環境・バイオサイエンス学科の中なかでもフィールドワークを重視した活動内容に特色があります。3年生の春はタケノコ掘りで始まります。森の中に入って土に触れることで、フィールドの感覚を養います。岡田山キャンパスは自然の宝庫で、これまでに野生植物約600種、野鳥約100種、キノコ約100種などが記録されています。この豊かな自然がゼミには恰好の教材となります。2年間でどれだけの知識を得られるかは、学生個人の資質や卒論のテーマにもよりますが、一生懸命努力すれば専門的に活かせる知識を得ることも可能です。

4年生のゼミでは各自のテーマを設定して卒業研究に取り組みます。当ゼミは森や草原などの植物群落を植生学や生態学の視点で研究しています。岡田山キャンパスのような都市圏の孤立林では、飛翔能力のある野鳥による種子散布が森林の形成や維持に重要です。そこで、数年前からゼミ生と岡田山に集まるカラスの生態を調べ、その食性や行動とキャンパスの森の成立との関連を探っています。ゼミの主要な研究テーマに、コナラやアベマキ、ナラガシワといった里山の雑木林を形づくるナラ類の研究があります。里山の生物相に関する研究は数多くありますが、その主体をなすナラ類自体の研究は多くありません。当ゼミでは、ナラ類の自発落枝の動態から、アベマキやコナラの自然(原生的)生育立地の探索など、幅広い視野で取り組んでいます。

(環境・バイオサイエンス学科教授)



春のタケノコ掘り(2016年度3年ゼミ)

<課外活動紹介>

[クラブ] 箏アンサンブル鷺

部長

箏アンサンブル鷺の活動

私たち箏アンサンブル鷺（さぎ）は、1976年に現代邦楽研究会「鷺」として設立されました。

お琴と聞くと、難しく堅苦しいイメージがあるかもしれませんが、“鷺”の魅力は、古典に限らず、ジブリやJ-POP、クラシックなど幅広い楽曲への挑戦にあります。今年の定期演奏会では、ミュージカル「オペラ座の怪人」の楽曲を、お琴用の譜面にするとところから作り上げました。定期演奏会は年に1回行っており、衣装や曲の演出まで毎年部員の皆で趣向を凝らしています。

“鷺”は演奏会以外にも、愛校バザーや岡田山祭での出店を通じて学校行事に参加したり、年に数回行われる国際交流で神戸女学院大学に来ている留学生にお琴を体験していただく活動をしています。お琴は初心者でも挑戦しやすいため、留学生の方々も興味津々になってすぐに夢中で弾いてくれます。そんな風にお琴によって日本文化に触れて喜んでいる姿を見ていると、やっていてよかったなと思います。また最近では留学生の方が1人入部してくれました。

部員に学年の壁はあまりなく、楽しく息の合った演奏をするため日々練習に励んでいます。そして、いつも私たちの活動にご協力くださるOGの皆様や先輩方から受け継いだ「温かさ」をさらに発展させることができるよう、“鷺”は今後も羽ばたいてまいりたいと思います。



演奏会での大合奏

[クラブ] 合気道部

部長

私たち神戸女学院大学合気道部は1991年に本学の名誉教授である内田樹先生によって創部され、主に岡田山ロッジにて活動を行っています。現在の部員数は28名で、そのほとんどの部員が大学から始めた初心者でした。合気道は中学生や高校生で運動系の部活に入らなくてもでき、また競技を行いません。習熟度にあわせて技を繰り返し稽古し、心身の練成を図ることを目的としています。現在では部員たちは積極的に審査を受けて経験を積んでいます。

主な活動としては、5月は東京の武道館で行われる全日本合気道演武大会への参加や、東京大学と早稲田大学との合同稽古。10月には日本全国の道場が合同開催する合宿に参加し、本部道場師範である多田宏九段に指導を受けました。また岡田山祭で他大学や稽古を共にしている凱風館の方々をご招待して演武を開催し、11月には早稲田大学や東京大学からの招待を受け学園祭に参加し演武を行いました。他には年2回、内田樹師範が主催する凱風館の合宿に参加しています。また、部員でハロウィンパーティーや、クリスマスの時期にはイベントを開催して部員間の親睦を深めています。

このようにイベントが多く、また様々な年代や他大学との方々と交流を持つことが多い部活です。合気道を通じて交流することによって自分の世界が広がっていくのが実感できます。自分の世界を広げたい方、武道に興味がある方は是非合気道部に一度見学しに来てみてください。



岡田山祭にて内田樹師範と部員の集合写真

中高部報告

World Scholar's Cupアテネ大会参加報告

高等学部 2年生

私は7月にアテネで開催された World Scholar's Cup (WSC) の世界大会に参加しました。WSC とは世界50か国以上の約2万人の中高生が英語で参加する総合的な教養を競う大会です。3人1チームで決められた6つの教科について、ディベート・ライティング・ペーパーテスト・クイズの4競技で得点を競います。また競技だけでなく様々なソーシャルイベントがあり、国際交流を深めることができます。Scholar's Scavenge は異なる国の選手が集まって1チームになり屋外を散策しながら共に課題をこなすというもので、他国の選手と沢山話すことができました。また Talent Show では選手が自分の得意なことや自国の文化を皆の前で発表するのですが、私たち日本チームはソーラン節を披露しました。発表前の練習を通して日本チーム内でもとても仲良くなることができました。

コンテストではどの競技においても周りのレベルの高さに終始圧倒され、特にディベートでは他国の選手は短時間の準備で皆堂々と表現力豊かなスピーチをしていてとても驚きました。競技中アクシデントなどがあり悔いは残りますが、結果イェール大学で行われる決勝大会への出場資格を得ることができました。次回はもっと準備を重ね、良い結果を残せるよう頑張りたいと思います。

今回多くの貴重な経験ができ、充実した1週間を過ごすことができました。私を支えてくれた両親、そして共に競ってくれたチームの2人にはとても感謝しています。有難うございました。

World Scholar's Cup 2017

高等学部 2年生

ワールドスカラーズカップ(通称:WSC)は、50カ国を超える世界中の国々から学生が集まり総合的な教養を競う大会です。本年度は日本では関東、関西に続いて3地区目となる九州大会が開催され、私たちのチームは九州大会に挑戦しギリシャに行く権利をいただくことができました。

大会は事前に年ごとに定められたテーマがあり、それに沿って学習を深めて挑みます。“Scholar's Bowl”, “Scholar's Challenge”, “Team Debate”, “Collaborative Writing” の4種目があり、私たちのチームが一番苦戦したのはディベートでした。即興ディベートなので速いサーチと文章構成能力が必要なのですが、3試合中とうとう一勝もできず悔しかったです。逆に、“Scholar's Bowl” というチーム戦のクイズ大会ではリサーチの成果が発揮でき、チーム銀という好成績を残すことができました。大会以外にもプログラムは充実していて、大会側にランダムで決められた国混合チームでパルテノン神殿を目指しながらミッションをクリアしていくイベントやタレントショー、夜にはダンスパーティーがあるなど他国の学生と親睦を深める機会が沢山ありとても楽しかったです。大会期間中ほとんどの時間を共に過ごした日本チームは本当に仲が良く、タレントショーでは皆でソーラン節を披露しました。ホテルや公園でビデオを見ながら一緒に練習する中で、より絆が深まったように思います。決勝大会は名門イェール大学の構内で行われることもあり、緊張もありますがさらに万全の状態を臨みたいですよ！

「夕暮れと電柱と私」

中学部 3年生

8月中旬に催された第3回兵庫県私学フェスティバル・アートフェスティバル2017において、兵庫県知事賞をいただきました。最初に入賞したと聞いたときは全く実感が湧かず、面を食らいました。それから授賞式に行き、緊張しながらも表彰状をいただき、飾られている自分の絵を見て、本当に今までにない貴重な体験をしているなあと、初めて実感しました。

その絵を描き始めたのは今年の春で、空が好きでよく放課後に写真を撮る私は、その時も自分のお気に入りの写真の中から迷いに迷って暮れかけた通学路の空の写真を選びました。ちょうど1年ほど前に美術部に転部したばかりで、キャンパスに線画を描くところから自分がのせたい色を油絵具で作るところまでとても苦労しました。しっかり最後まで描けるか不安でしたが自分の好きな風景だったので思考錯誤しながらも諦めずに頑張ることができ、また先生やデザインの仕事をしている父にアドバイスをもらって、なんとか納得のいくものを完成させることができました。

授賞式に行ったときに見た高校生の受賞作品はどれも本当に素晴らしくて、自分の油絵の技術はまだまだであることを思い知らされました。しかし、全力で何かに打ち込んでいる他の神戸女学院生を見て何もない自分に負目を感じていた私にとって、今回のことは自分が好きで頑張れるものを見つけるきっかけになりました。Sになってからもどんどん描いていこうと思います。

みやぎ総文を終えて

高等学部 2年生

私は8月1日に宮城県で開催された全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門に、兵庫県の五将として参加しました。今年の4月23日に兵庫県立武道館で兵庫県代表を決める予選が行われ、代表メンバーが決定しました。メンバー8人のうち2年生は私も含めて2人だけだったこともあり、出発前は不安でいっぱいでした。7月31日に宮城に向けて出発し、1日目は懇親会の後で予選リーグの抽選を行いました。抽選の結果、兵庫県は北海道、秋田県、山口県と同じリーグになったのですがこれはかなり運が良かったと思います。抽選の後ホテルに戻り、みんなでバーベキューをした後作戦会議をし、部屋に戻ったり卓球をしたりと思い思いに過ごしました。2日目、いよいよ試合が始まりました。予選はリーグ内での総当たり戦で、兵庫県はすべての試合に勝ち予選リーグ1位で決勝リーグ予備戦を迎えましたが予備戦では抽選の結果宮崎県と対戦し、残念ながら敗れてしまいました。全体の結果として兵庫県はベスト16止まりとなり、個人的にとっても悔しく思っています。今回の全総文で私は代表という言葉の重みを知りました。私も対戦相手も自分の都道府県を背負って戦っています。緊張感の中で、会場にいる人全員がそれぞれの役割をもち輝いていました。団体戦のかかるたのかっこよさを改めて感じました。今回の経験を糧にして来年はより良い結果が残せるよう今後も精進していきます。

心臓移植手術を見て

高等学部 2年生

早期医療体験プログラムは心臓外科の医師の方々
が働く様子をつぶさに見ることができるもので
した。その中で日本全国でも1週間に1度行
われるかどうかの心臓移植手術を間近で
見る機会をいただきました。

手術が行われているのを見る間は、唯々驚き
と共に目の前の現実を受け止めることに精
一杯で、いわゆる感動を感じる心の余裕は
ありませんでした。心臓が再び拍を打ち
始めた時には、見学者にすぎない私もや
っと息をつくことができました。移植は
人の死と臓器提供があつてこそ成り立ち、
倫理観が問われます。日本で初めて小
児心臓移植を行った先生でさえ、ご自
身の子どもの臓器を提供できるかはその
場にならないと分からないと仰ってい
ました。私たちも、自身や家族の臓器
を提供するかを考える必要に迫られたり、
移植が必要になるかもしれません。移
植を目の当たりにし、生命倫理等、多く
のことを私たちは常に考えなければなら
ないと痛感しました。

研修後、私は移植に関する新聞記事に
目が行くようになりました。そこには患
者さんの気持ちが率直に記されており、
人との対話がいかに大切かを気付か
されました。研修中に印象的だった
ことは、体力的に過酷な仕事にも関
わらず、どの医師も仕事に誇りを持
っていると仰っており、仕事を楽し
んでおられるようだったことです。私
は、技術を身につけることは勿論、人
の心に寄り添い、学び続けることを
楽しめる人になるよう努めていこうと
強く心に思いました。

医師としての心構え

高等学部 2年生

8月14日から18日の間、大阪大学
医学部心臓血管外科で行われた、高
校生早期医療体験プログラムに参加
しました。このプログラムは早朝から
医師の方とともに活動して実際の医
療現場を体験し、「なぜ医者になり
たいのか」を考え、「医師になる覚悟」
を学ぶプログラムです。

カンファレンスに同席し、回診につ
いていき、そして手術の見学をし
ました。また手術中に使う人工血
管などの使い方も説明していただき
ました。

5日間、毎日異なる手法の手術を見
学しました。生後間もない赤ちゃん
の心臓が目の前で鼓動を打っており、
懸命に生きていることに心動かされ
ました。その他、人工心肺をつける
手術や最新技術を用いた手術。1つ
1つの手術に発見と驚きとそして学
びがありました。

また先生方は医師としての心構えも
たくさん教えてくださいました。ある
会話の中で、「医者是一般にすごい
や立派だと言われるけど、それは賢
いからじゃない、ここがあるからや」
そう言って胸を力強く叩いた先生
の姿は忘れられません。世のため、
人のためを実践している先生方を
目の前で見るのができたのは本当に
貴重な体験でした。

このプログラムを通して、頭で学んだ
こと、肉体的に学んだこと、そして
心で学んだこと、これら全ては私の
将来への思いへと繋がりました。こ
のプログラムで学んだことを糧に
将来の夢に向かい日々邁進して
いきます。

お世話になった先生方、ありがとう
ございました。

赦しの授業

高等学部 2年生

ソロプチミストフォーラムの参加にあたり教育についての作文を依頼された時、その日聞いた「校則違反をした生徒を罰するのではなく、なぜ悪いのかを理解し、どう解決するかを考えさせる学校が増えている」という話を思い出しながら、「赦しの授業」を取り入れてはどうかと提案した。友達に裏切られた時や、昨日まで殺しあう敵側だった人とどうやって一緒に生きるのか、などのシチュエーションで、どのように赦すかを考えるのだ。あまり深く考えずに書いたこの文章がフォーラムで会長の方に取り上げられて、私は改めて罰と赦しについて考えた。

私たちの社会では、何か悪いことをすれば裁判にかけられ懲役の罰を受けるのが至極普通な考え方が、私たちが学ぶ「普通」が全て正しいわけではないということはこの頃私はようやく実感した。この世は信賞必罰でもなければ悪の定義も違ふし、罪人にも事情はある。J1の探究で虐待する親の葛藤について調べた時、過ちを犯した人は罰ではなく更生、つまり愛が必要だと学んだ。とはいえ罪人を野放しにするのは非現実的と言うが、国の裁判制度を変えることはできなくても、自分がどう感じ行動するかは自分次第だ。

赦すという技術は際限のない争いに辟易した世界において結構有効な手段ではないかと思う。また私も他が作った規範に盲従してきたが、教育を定義したのは政府であり、本来教えるということは何でもありなのだ。本来の教育という意味で、赦しという難しい行動を語り合っただけで学び、養う意義はあると私は思う。

リーダーシップトレーニングキャンプ

中高部6年間のクラス活動、行事、クラブ活動などでは、主体的な行動を求められることが頻繁にあります。リーダーシップトレーニングキャンプは「リーダーシップとは何か」をじっくり考える場であるとともに、中高部での生活に欠かせない「主体的に動く」ことを意識的に実践し、その大切さを考える場としても機能しています。学年もクラブも異なるメンバーが協力してさまざまなプログラムに取り組む中で、周辺状況を把握したり、先を見越したりしながら主体的に動くことの難しさや大切さ、うまく動けたときの達成感などを体感しています。

昨年まで学外施設にてキャンプを実施してきましたが、学内環境がプログラムに十分適していること、岡田山ロッジの利用によって参加費用の大幅削減が可能なることから学内で実施しました。学内実施によって移動時間が不要になり、キャンプに時間的ゆとりが生まれたことは大きな改善点です。その結果、予定通りにプログラムをこなすことに追われ、キャンプ後半では疲労も重なってプログラムに集中して取り組めないこともあった、という従来の課題を少なからず克服できたと思われます。最高学年であるS2が初の学内実施、プログラムの再構築を牽引してくれたおかげで、充実したキャンプとなりました。S2だけでなく、参加者全員のキャンプ全体を通して自分の役目を全うしようとする姿、他学年との交流を楽しむ姿が印象的なキャンプでもありました。

(中高部教諭)

<留学報告>

フィンランドで過ごした10ヶ月

高等学部 3年生

私はS2の8月からS3の6月まで、10ヶ月フィンランドに留学していました。私は前からフィンランドに興味があり、フィンランド語を話せるようになりたいという思いからフィンランドを選びました。

私が住んでいた Somero という町は小さな田舎町で、高校も神戸女学院と比べるとかなり小規模でした。学校生活は何もかも新しいことばかりで大変戸惑ったのを覚えています。一番印象に残っているのは、生徒が先生のことを下の名前でまるで友達のように呼ぶことです。先生と生徒の関係が親密で、かつお互いを尊重し合っているのがよくわかりました。また私は声楽を習っていたこともあり、学生のコーラス隊に入り、コンサートにも参加しました。初めは、学校でもコーラスでも友達を作るのに苦労しましたが、私が勇気を出してフィンランド語で話すとともに喜んでくれて徐々に仲良くなりました。

1年間で一番楽しかったイベントは vanhojen tanssi というダンスパーティーでした。高校2年生の学生たちが伝統的なダンスを披露するもので、私も参加することができました。フィンランド語で全ての踊りを習得するのは本当に大変でしたが、先生や友達の支えもあり、無事成功しました。

10ヶ月の間、ホストチェンジをしたり、笑われて辛い思いをしたり、差別を受けたり辛い経験もたくさんしました。

でも、これらの貴重な経験を生かしながら、生きていきたいと思っています。

関わりのないはずだった世界

高等学部 2年生

私は半年間、オーストラリアのパースにあるメソジストレディーズカレッジという神戸女学院の姉妹校に交換留学させていただきました。家族と離れて異国で生活するなど想像もできなかった私ですが、素敵なホストファミリー、友達、先生方のもとで豊かな自然と人柄のパースを満喫できました。

放課後いつの間にかクリケットの試合に出ていたり、田舎に住む同級生の家で馬の水浴びを手伝ったり、授業中に金持ちのうごさを描いたドキュメンタリーを見たり、キャンプファイヤーを囲んだり、飲酒・薬物に手を染める未成年が多すぎるため逆に安全な飲酒の仕方を講演する先生に感動したり、心理学のクラス13人で合わせて9か国もの言語が話せるということに驚いたり、親子喧嘩を引き起こし迷惑をかけたり、「場面設定がもたらす美学的・象徴的な意義」というテーマの文学エッセイに苦心したり、息をのむような天の川の下で友人と深夜まで語り合ったり。自分と関わりのないはずだった世界に今居ると思うと不思議で何度も感極まりました。

この機会を通して、人生とは何かについて、周りからの刺激や自然の情景を通して感覚的に学びました。これは、この世で答えを知る人が一人もいない問いだけに、神秘的な学びでした。留学に限らず、自分が自らの人生の主人公であるという感覚をもってこれからも過ごしていきたいと思っています。

S 校内大会

2017年度のS校内大会は、1学期期末試験終了後の7月6日(木)に行われました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの5種目で、体育祭の縦割りとは違い全学年クラス対抗戦で試合が行われるので、毎年先輩に食らいつく後輩の勢いを、どう先輩が返り討ちにするのか、起きてはならない下剋上が起こってしまうのか、どの試合も白熱した好ゲームが繰り広げられました。午後から雨予報であったため、閉会式前に予定されていたリレーの決勝を、予選後すぐに行いました。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る1日となりました。

ソフトボール

1位 S 2 C 2位 S 3 B 3位 S 1 A

バレーボール

1位 S 3 C 2位 S 3 B 3位 S 2 B

バスケットボール

1位 S 3 A 2位 S 3 B 3位 S 3 C

卓球

1位 S 3 A 2位 S 1 B 3位 S 2 A

リレー

1位 S 3 B 2位 S 1 C 3位 S 3 A

総合

1位 S 3 B 2位 S 3 A 3位 S 3 C

ブービー賞

S 2 A

中学部校内大会

7月10日(月)中学部校内大会が行われました。開会礼拝では皆でフェアプレイを誓い合いました。カラフルなクラスTシャツを着て挑む中学部校内大会では、各クラス選抜のリレー、ポートボール・卓球・ドッジボール a・b の種目に分かれ、クラス対抗で試合を行います。各種目どのチームも、暑さにも負けない熱い戦いが繰り広げられました。

閉会式では、心地よい疲労感の中、皆の健闘を称えあいました。1学期の締めくくりの行事として、皆の良い思い出となりました。より一層クラスの仲を深めることができました。

総合

1位 J 2 A 2位 J 3 B 3位 J 3 A

ドッジボール a

1位 J 2 A 2位 J 3 A 3位 J 1 A

ドッジボール b

1位 J 2 B 2位 J 2 A 3位 J 3 B

ポートボール

1位 J 3 B 2位 J 3 A 3位 J 2 A

卓球

1位 J 3 A 2位 J 3 B 3位 J 1 A

リレー

1位 J 2 A 2位 J 3 B 3位 J 3 C

(J 校内大会係)

(S 体育部顧問)

夏の修養会 釜ヶ崎訪問

高等学部 3年生

釜ヶ崎での炊き出しには多くの人が並ぶ。その中にはお礼を言ってくれる人もくれない人も、目を合わせてくれる人もくれない人も、いる。そんなことは人間なのだから当然だ。しかし、私はどうしても自分に都合の良い反応を期待してしまう。自分は炊き出しを待っている人のために一途に貢献することはできないと思ってしまう。だが、この手で現状のほんの一部とはいえ触れてしまったのだから、何もなかったことにはできない。

釜ヶ崎訪問を経て、街で路上生活をしている人を見る度に、言いようのない後ろめたさと、生まれ育った大阪で起きている生々しい現実を突きつけられたように感じる。そして、今まで無知であったことと、現在知っているのに何もしないことへの両面にそれぞれ罪があるのだと気づく。

この状態を変えるため何が自分にできるのか。その最も簡単にできることは、伝えることだ。今の社会は釜ヶ崎の状況を表に出さず、見てみぬふりをしているように感じる。それを変えることができるのは、将来の私たちだろう。高校生のうちにこのような体験ができたことに大きな価値を感じている。

ゼロからイチを生むのは大変だというのが、本当に大切なのはそれを繋げていくことだと思う。一度経験しただけで満足してはいけない。釜ヶ崎訪問は日雇い労働者の現状を知ることができる良い機会であるが、知ったからにはその先を考える責任があるのだ。それを果たしてこそ真の奉仕といえるのだろう。

夏の修養会
「白浜訪問報告」

7月24日(月)、25日(火)で白浜訪問に行ってきました。参加者はS3が1名、S2が5名、S1が1名、J3が4名の計11名です。引率は教諭3名です。

白浜訪問は今年で2回目となります。白浜バプテスト教会の藤藪庸一先生は、自殺者の多い、白浜の三段壁で保護・共同生活をして自立まで支援していく活動をされています。その活動の一環として、子どもたちに教会を開放し、安心して暮らせる共同体作りを通して、自殺者の出ない社会を作る活動をされています。神戸女学院の生徒たちはその子どもたちの居場所作りのプログラムである、「コベル君」に参加させていただいています。

昨年はこの「コベル君」におよそ80名の子どもたちが登録をされていて、常に30名近い子どもたちが毎日教会を訪れていましたが、白浜の学童保育が整って来たので、方針を変更し、私たちが訪問した時も、6名ほどの参加でした。

神戸女学院生はコベル君にやって来た小学生と遊んだり、自由研究のテーマを決めるのを手伝ったり、ドッチボールをしたり、一緒にお菓子を作ったりして楽しく過ごしました。

夜には宿舎に藤藪先生と共に活動をされている、安達世羽先生に来ていただいて、語らいの時を持ちました。日々悩みながら活動に従事する先生のお話は、同じように悩みや不安を抱えながら日々を生きる生徒たちの心に強く響いたようです。

(中上部教諭)

夏の修養会 長島訪問

7月19日から20日に、修養会・長島訪問を実施いたしました（参加生徒14名、引率教員3名）。

国立療養所長島愛生園には平均年齢が83歳を越える方々237名が生活しておられます。

ハンセン病は完治していますが、後遺症を抱えている方々です。この訪問では証言に耳を傾け、入所者の人生を支えてきた信仰について考える機会が与えられました。

1日目は学芸員の方に園内施設を案内していただきながら、愛生園の歴史と入所した方々の境遇や経験を学びました。「ここで暮らしているのは、困難の中にあっても一生懸命に生きている人々です。かわいい人々だと思わないでください」という言葉が印象的でした。歴史館には1933年から数年に渡って実施された入所者の住居建設のための募金活動の記録が展示されていました。その中に神戸女学院の募金によって「神女寮」が建設されたとあり、先輩たちの「愛神愛隣」の精神に触れる機会となりました。

入所者の方からは大切な証言を聞かせていただきました。ユーモアを交えて語っていただきましたが、その言葉の端々から悔しさや悲しみが感じられました。

宿舎では生涯隔離政策について考えを深め、私たちも人との関係において同じようなことをしていないだろうか、自分たちのあり方を考える時を守りました。

2日目には曙教会を訪れ、共に恵みに満ちた礼拝を守りました。

社会を広く、愛の眼差しで見渡すことの大切さを感じる2日間となりました。

(中高部教諭)

夏の修養会 広島訪問

7月27日から28日の日程で「修養会・広島訪問」を実施いたしました（参加生徒18名、引率教員3名）。

2012年に広島女学院高等学校の署名実行委員会の生徒との交流会をプログラムの柱として始まったこの修養会は、昨年度から金城学院を加えた3校で実施しています。

1日目は広島女学院を会場として各校のプレゼンテーションと話し合いの時を守りました。平和についての、各校それぞれのプレゼンテーションは、参加者の思考を刺激するようで、活発に意見交換をしていました。今年は金城学院と宿舎も同じにしたことで、共に被爆者の証言を聞き、ゆっくりと語らうの時を持つことができました。

2日目は平和記念公園で、広島女学院の生徒たちによる慰霊碑巡りの後、核兵器廃絶のための署名活動を経験しました。署名を呼び掛けても、誰もが快く引き受けてくれるわけではありません。生徒たちは署名を断られたり、反論されたりもしながら、広島女学院の生徒たちが平和のためにどれほど力を尽くしているのかということを考えさせられたことと思います。

「私たちは微力であっても無力ではないのだ」と信じて、青春をかけて署名活動を続けている者の姿は「私には何ができるだろうか」と自らの歩みを振り返るきっかけになったはずです。

「平和を実現する人々は幸いである」との御言葉に込めて生きているだろうかと自らを問い、それぞれの場で平和と和解を実現してくれるものと期待しています。

(中高部教諭)

2017年度 神戸女学院高等学部 訪米語学研修旅行

神戸女学院高等学部、訪米語学研修旅行団は7月16日(日)から8月6日(日)までの3週間、アメリカのミネソタ州にあるセントクロイ高校にて研修を行いました。

7月16日に予定通り伊丹空港に集合し、そこから羽田空港に向かいましたが羽田からミネアポリス行の便の出発が30分ほど遅れました。到着したミネアポリス空港では KCC-JEE の石田理事が迎えてくださいました。その後、研修先のセントクロイ高校に向かい、滞在する寮に荷物を運び、学校や寮の案内をスタッフにしてもらいました。翌日から語学研修が始まりました。今年度の参加人数は全体で150人、最年少は10歳の参加者で、参加国は中国、ベトナム、韓国、日本、ブラジルでした。

研修プログラムでは、初日の習熟度テストを受けた後、神戸女学院生は習熟度別の9クラス中6クラスに分けられました。プログラム中、午前中は英語の授業を3コマ、週替わりの特別授業(社会、数学、科学)を1コマ受けました。1週目は社会の特別授業があり、生徒たちはアメリカの州の名前をゲーム形式で学んでいました。午後は校外に出て English Buddy と呼ばれる現地の高校生とミネアポリスやセントポールにある様々な施設に向かいました。1週目のアクティビティはモール・オブ・アメリカでの借り物競争、ダコタ・シティ・ヘリテージ・センターという昔の暮らしが体験できる施設の見学や、NPO フィード・マイ・スタービング・チルドレンでの食料難地域の子どもたちに送る栄養食品の袋詰めを行いました。また、セントポール大聖堂やミネソタ州議事堂の内部を見学しました。この週の週末、金曜日から日曜日まで生徒たちは KCC-JEE から紹介していただいたホストファミリーのお宅に滞在しました。それぞれのご家庭で観劇などの様々な催し物に連れて行ってくださったり、川下りなど色々な貴重な体験をさせてくださったりしたようで、本当の家族のようによくしてくださいました。短いステイでしたが、お別れの日には生徒たちは涙ながらにホストファミリーとの別れを惜しんでいました。

2週目からそれまで改修中だったセントクロイ高校のチャペルでの礼拝が始まりました。この週の特

別授業は数学の授業でしたが、生徒たちは英語での数式の説明に苦戦していました。午後はミネソタ科学博物館、ミネソタ動物園、TCF バンク・スタジアムの見学をしたり、ローラースケートパークでスケートを楽しんだり、バレーフェア遊園地で乗り物に乗ったりしました。週末は土曜日にモール・オブ・アメリカでの買い物を行い、日曜日には近所の教会に行き、慣れない英語での礼拝や讃美歌でしたが神戸女学院生全員で礼拝を守りました。

最終週の特別授業は科学でした。各クラスで化学や物理の実験などを行いました。またプログラム最終日に催されるタレントショーに向けての練習を行いました。疲れがたまってきたのか、体調を崩す生徒も出てきましたが、参加できる授業やアクティビティに参加していました。バンカー・ビーチ・ウォーターパークのプールで泳いだり、ミネソタ大学とミネソタ歴史センターの見学をしたり、ツイنز対レンジャースの試合を見に行ったりしました。試合を7回まで観戦し、メジャーリーグの雰囲気を楽しむことができました。プログラム最終日には英語のクラスごとと各団体ごとのショーを行いました。本校生は日本の伝統的な踊りとポップな振りを合わせた踊りを披露し、大いに盛り上がりました。翌8月5日、予定通り帰路に就きました。日本時間6日の15時に羽田到着。心配していた台風直撃も免れ、全員無事伊丹に到着しました。

セントクロイ高校の教職員・スタッフ、ホストファミリーの皆様、KCC-JEE の石田理事に支えられて、生徒たちにとって語学力向上だけでなく、忘れられない体験となりました。心より感謝申し上げます。

(中高部教諭)

夏山登山

今年の夏山登山は、鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳に登りました。参加者は生徒45名（J2～S3）、教員9名の54名に、現地ガイド1名と添乗員1名の総勢56名のパーティーでした。

1日目、バスで移動し、信濃大町の旅館に宿泊。2日目、旅館を出発し、扇沢で現地ガイドと合流、8時より登山を開始しました。最初は急登で景色もあまり見えませんが、小さい雪渓や切り立った斜面など普段の遠足とは異なる険しい道を楽しく歩くことができました。種池山荘で昼食をとった後は視界が開け、アップダウンのある道を進み、爺ヶ岳中峰を踏んで冷池山荘に到着しました。3日目、雲海の上で礼拝を守りました。晴天のもと軽装備で出発し、布引岳を経て8時30分に鹿島槍ヶ岳南峰に無事全員が登頂、学年ごとに記念撮影をしました。眼下に広がる様々な山の姿に歓声が上がっていました。帰路は一旦冷池山荘に寄ってカレーをいただき、爺ヶ岳南峰で一休みしてから種池山荘に戻ってきました。4日目は扇沢まで下山し、1泊目の旅館で入浴・昼食後、西宮北口で解散しました。

今回は参加者全員が一緒に行動し、山小屋での2泊、そして4つの山への登頂を果たすことができました。体方面・精神面で大きく成長し、夏休みの良い思い出となったことでしょう。伝統ある「夏山登山」がこれからも様々な方のご協力のもと、安全に実行していけるよう願っています。

(夏山登山ディレクター)

エンパワーメント・プログラム 2017

本年度のエンパワーメント・プログラムは7月24日(月)から28日(金)の5日間、トリニティ・ホールで行われた。参加生徒はS1が5名、J3が36名、J2が2名の43名。教員6名が付き添った。

米国名門大（マウントホリヨーク、ハーバード、UCバークレーなど）の女子学生8名とファシリテータのMarianne先生を迎えて始まった今年のプログラム。最初生徒たちは緊張した面持ちで聞き手に回り、リーダーの大学生が話す場面が多いように感じられた。ところが日を重ね、ゲーム、ディスカッション、プレゼンテーションの機会が与えられ、リーダーとも打ち解けてくると、生徒たちは英語を話すようになっていった。それも、初めは先にスクリプトやメモを書きそれを読もうとすることが多かったが、後には何も見ないでスピーチしたり、スキットを演じたりできるようになっていった。

生徒たちは人前で英語を話す機会がほとんどない。だから「自分は英語が話せない」と思い込んでいる。しかし、エンパワーメント・プログラムのよく練られたカリキュラムの中で英語を聞き、話すうちに、生徒たちは「いつの間にか人前で英語を話している自分」を発見するのだ。

このプログラムが、参加生徒ひとりひとりに力を与え、内在する能力を花開かせ、新しい世界に挑戦する勇気の源となるよう、また生徒たちの経験が、将来、具体的な action に繋がるよう心から祈っている。

(国際教育委員長)

2017年度文化祭 “Toy”

今年度の神戸女学院中高部文化祭は、9月15日(金)に校内用文化祭、9月16日(土)に校外用文化祭の日程で開催されました。

8月の終わりから複数回発令された全国瞬時警報システム(通称:J-ALERT)の影響や、台風18号の接近に伴う各種警報の発令の可能性など、文化祭の開催自体が危惧されましたが、一部、屋外で実施予定であった催し物を除いて、予定通りに実施することができました。

今年度の文化祭テーマは“Toy”でした。このテーマには「すばらしい装飾や企画で、お客様に、まるでおもちゃで遊んでいるかのような楽しさを味わっていただきたい」という意味が込められています。また、「幼いころに、お気に入りのおもちゃを手に取り遊んだワクワク感も味わってほしい」という思いも持ちながら、生徒たちは準備を進めました。

本校の文化祭は、各クラスや学年・クラブ、有志団体の単位で展示作成などを行います。これらの企画・運営を行うのが、文化祭企画実行委員会(通称:文企)と呼ばれる、有志の生徒によって組織される委員会です。この委員会は、前年度の文化祭が終了すると同時に、次期委員の選出等が始まり、およそ1年間をかけて、生徒自治会と協力しながら準備を進めていきます。準備の内容は、展示や催し物の募集と出展場所の調整、パンフレットやチケットの作成と印刷の発注、装飾物の作成などなど、非常に多岐にわたります。これらの準備・活動に、幹部と呼ばれる生徒(主に高等学部3年の生徒)が各部門のリーダーとなって取り組み、企画を進めていきます。これらの活動も、生徒が主体となって取り組んでいくところが、本校の行事の大きな特徴でもあります。このような活動を通して、生徒たちは自主性・主体性・たくましい行動力などを身につけているものと思います。

今年度の文化祭は、先にも記したような台風接近に伴う延期や中止等が心配されましたが、予定通りの日程で実施することができました。

例年同様に、各クラスや学年・クラブ、有志団体による工夫を凝らした展示、音楽やダンス、劇など

の舞台発表、階段や廊下の天井の賑やかな展示物など、学校全体に楽しさがあふれる2日間になりました。雨天のために、例年であれば屋外(藤棚)で実施し、校外の皆様にも公開しているエンディングプログラムが、屋内(講堂内)で、校生のみを対象として行わざるを得なかった点が残念でしたが、出演した団体は、精一杯のパフォーマンスを披露してくれました。

最後に、足元が悪い中、ご来校くださった方々にお礼を申し上げます。

(中高部教諭)

2017年度芸術鑑賞会報告

2017年6月19日、13時30分より西宮アミティホールにて2017年度の芸術鑑賞会が開催されました。演劇の鑑賞年度にあたる本年は、東京演劇集団「風」による、「ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち」を観劇しました。

ヘレン・ケラーといえば「奇跡の人」として演劇や映画において有名ですが、この風による「ひびき合うものたち」は松兼功氏の脚本によるものです。松兼功氏は、自ら脳性まひにより体の自由が利かず、現在も食事や入浴に介護が必要な状態にあり、この脚本も仕事部屋のワープロのキーボードを斜めにたて、鼻先でつつき、文字を入力されたそうです。三重苦を抱えたヘレンとそれを取り巻く家族、そしてアニー・サリバン。人間同士だからこそ、激しくぶつかり合う心と心。そこに「人と人とのつながりの可能性の物語」を力強く描いたこの作品の背景には、その松兼功さんの強い想いを感じ取ることができました。

生の舞台だからこそその迫力と、同じく生の舞台だからこそその繊細さ。ヘレンとサリバンの「飽くなき人間への好奇心と愛情の交感の物語」は、劇団員の皆さん、スタッフの皆さんの熱い演技と想いを通して、私たちにダイレクトに伝わってきたように思います。現代のSNSの時代だからこそ、「面と向かって伝える」ことの意義を、深く感じられた鑑賞会でした。

(中高部視聴覚委員会)

2017年度キャンパス見学会

2017年度の神戸女学院中上部キャンパス見学会は11月18日土曜日、9時45分に受付をスタートした時点ではあいにくの雨にもかかわらず、予定していた以上の多くの皆様にご来校いただき、受付が一時滞り、たくさんの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。雨天の対応、受付・抽選の手順など、多くの反省点・改善点を得られた会となりました。

しかししばらくして雨はやみ、各展示や模擬授業、キャンパスツアー、クラブ活動の発表など、それぞれ盛況のうちにプログラムを進めることができ、何より、昨年度の約1.5倍の750組超えの皆さんにご来校いただき、入試説明会では昨年の倍の方々にご出席いただいたことは、本校の教育に高い関心をもっていただいている結果であろうと、背筋の伸びる思いです。

現代は社会全体が効率性を重視し、一人ひとりの人生においても、無駄なく有用なもののみを選択する効率のよい生き方を目指しているのかもしれませんが、しかし、本校の生徒たちが、先を行く先輩の力強い背中を追いながら、勉強に、行事に、諸活動すべてに愚直にも全力で取り組む姿勢は、時代を超えて教育のあるべき姿を具現化しているようにも感じます。そうした在校生の生き生きとしたまなざしに触れ、彼女たちの背中を目標に、受験生のひとりとしての一步を踏み出そうとする、そんな機会をサポートする見学会となれば幸いです。

(校務課)

「秋の子ども会」報告

去る11月23日、本校を会場にして、恒例の秋の子ども会が開催されました。当日は、有志のグループリーダーと高等学部の新旧役員会のメンバーが入念な準備をして、神戸真生塾の子どもたちの到着を待ちました。

朝10時過ぎに開会、今回の実行委員長であるS3の生徒による開会宣言・お祈りがなされた後、子どもたちは屋内で、S化学部の指導の下、実験器具を用いたスライム作成に熱意を注ぎました。その後はポップアップカード作り、折り紙や塗り絵に興じつつ、それぞれが「自分だけのお姉さん」とのひとときを満喫したようです。

お昼は、S役員会のメンバーが腕によりをかけたハヤシライスとマカロニサラダが試食室にて振るまわれました。お代わりする人も続出し、お腹も心も満足できるひとときとなりました。

昼食後は、ボール遊びや大縄遊びをして楽しい時間を過ごしました。そして、午後2時過ぎに、役員会メンバー手作りの杏仁豆腐をいただいた後、子どもたちは、S料理研究部が作ったクッキーなど、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られ、笑顔で帰って行きました。

今回は他の行事と重なったため、グループリーダーの数が足りず、J3有志にもお手伝いしていただいていた無事に子ども会を終えることができました。皆の尽力に心より感謝申し上げます、「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は4名でした。

(高等学部役員会顧問)

<課外活動紹介>

[クラブ] Jバレーボール部

支えられているありがたさ

2017年秋、新チームになってすぐ1名が留学・転校し、部員全員で試合出場ぎりぎりの7名。通算55勝171敗の過去最高練習試合数を誇り、夏の総体で阪神大会出場チームをあと一步まで追い詰めたJ3の8名とは全く違う1からのスタートでした。

しかしそんな逆境に負けず、少数ならではの学年を超えたチームワークで、未経験者J1が4名入ったにもかかわらず、秋の新人戦予選で2勝！その陰にはいつも支えてくれたSの部員、応援してくれた保護者の皆様がありました。感謝でいっぱいです。

(Jバレーボール部顧問)

[クラブ] Jコーラス部

Jコーラス部は現在24名です。校内での発表の他、Sコーラス部と合同で「灘高校グリークラブ定期演奏会」に賛助出演させていただき、混声合唱も経験しています。学院クリスマスでは、音楽学部のオーケストラ、合唱と合同で演奏する曲もあり、毎年楽しみにしています。昨年度は兵庫県合唱連盟主催「ヴォーカルアンサンブル・コンテスト」で銅賞を頂き大きな励みとなりました。今後も幅広い活動を目指します。

(Jコーラス部顧問)



[クラブ]

S競技かるた部**「ちはやふる」の世界**

競技かるた部は、5年前当時のS1が有志仮クラブとして立ち上げ、翌年度正式にクラブと認められた新しいクラブですが、今年度は兵庫県代表チームの一員として近畿大会、全国大会に出場する選手が出るなど、短期間にめきめき実をつけています。

練習は岡田山ロッジで行っています。「畳上の格闘技」と言われるだけあって試合は激しく、鍛えていなければ腕を捻挫したり、突き指や腱鞘炎になったりします。また、読手の最初数文字で即座に札を取りに行く並外れた集中力と瞬発力も要求されます。

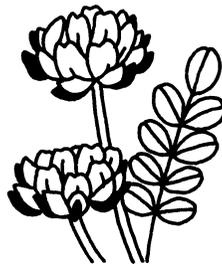
(S競技かるた部顧問)

[クラブ]

Sテニス部

Sテニス部は、4月末から5月下旬にかけての兵庫県総体を皮切りに、8月から10月にかけて行われる新人大会、阪神リーグ、そして夏季ジュニア、12月のウィンタージュニア、3月の春季ジュニアと、様々な大会の団体戦・個人戦に向けて、部員同士切磋琢磨しつつも和気藹々と練習を重ねています。夏合宿は山陰へ出かけ、湖畔のコートで練習、春休みには岡田山ロッジで総体に向けて合宿し、OGメンバーとも懇親を深めています。

(Sテニス部顧問)



〈学院日誌〉

9月6日(水)	中高部教員会議	11月1日(水)	中高部教員会議
9月15日(金)(校内用)・ 16日(土)(校外用)	中高部文化祭	11月15日(水)	中高部教員会議
9月20日(水)	中高部教員会議	11月17日(金)	教授会
9月26日(火)	中学部入試説明会	11月18日(土)	中高部キャンパス見学会
9月27日(水)	理事会	11月22日(水)	理事会
9月30日(土)	神戸女学院特別講演会「タルカッ ト先生に導かれて～小野鶴、小野ア ンナ、オノヨーコと神戸女学院～」		臨時評議員会
10月4日(水)	中高部教員会議	11月29日(水)	中高部教員会議
10月9日(月)～13日(金)	高等学部修学旅行	12月15日(金)	教授会
10月11日(水)～13日(金)	中学部小旅行	12月19日(火)	中高部教員会議
10月13日(金)	教授会	12月20日(水)	理事会
10月18日(水)	中高部教員会議		
10月25日(水)	理事会		

目 次

中高部礼拝の歴史と意味……………	1
「故城崎進元理事長・院長追悼礼拝」報告 ……	3
神戸女学院特別講演会「タルカッ ト先生に導かれて」…	4
KCC だより ……	5
学院リトリート報告……………	8
2017年度 宗教強調週間……………	8
史料室の窓・Herstory of Kobe College ……	11
キャンパスお気に入りの場所……………	15
大学報告	
大学生が考える防災 ～大学で被災したら～…	16
初めての学会発表を終えて……………	16
プロジェクト科目（インド実習）の取り組み…	17
「神戸女学院の100冊」書評コンテスト…	17
ウラジミール マラーホフ氏による公開講座…	18
第7回関西の音楽大学オーケストラフェスティバル in 京都コンサートホール…	18
留学生紹介……………	18
留学生自己紹介……………	19
派遣留学報告……………	20
語学研修報告……………	23
保護者懇談会報告……………	25
音楽学部夏期講習会報告……………	25
夏期インターンシップ実施報告……………	26
インターンシップ参加報告……………	26
2017年度 SD 研修会 ……	27
2017年度大学教授会研修会報告……………	28
百花繚乱……………	28
大学クローバー賞授賞式……………	29
2017年度めぐみ会賞……………	29

私の研究……………	30
ゼミ紹介……………	31
課外活動紹介……………	32
中高部報告	
World Scholar's Cup アテネ大会参加報告…	33
World Scholar's Cup 2017 ……	33
「夕暮れと電柱と私」 ……	34
みやぎ総文を終えて……………	34
心臓移植手術を見て……………	35
医師としての心構え……………	35
赦しの授業……………	36
リーダーシップトレーニングキャンプ…	36
留学報告……………	37
S 校内大会……………	38
中学部校内大会……………	38
夏の修養会 釜ヶ崎訪問……………	39
夏の修養会 「白浜訪問報告」……………	39
夏の修養会 長島訪問……………	40
夏の修養会 広島訪問……………	40
2017年度 神戸女学院高等学部 訪米語学研修旅行…	41
夏山登山……………	42
エンパワーメント・プログラム 2017…	42
2017年度文化祭 “Toy” ……	44
2017年度芸術鑑賞会報告……………	45
2017年度キャンパス見学会……………	49
「秋の子ども会」報告……………	49
課外活動紹介……………	50
学院日誌……………	52

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。

7, 10, 12～14, 43, 45～48